京都府立大学学術報告「人文」第72号　（2020年12月）

学者としてのグリム兄弟
―― 法、文学、言語、民俗、宗教、歴史 ――

横道　誠

グリム兄弟――ヤーコプ・グリム（Jacob Grimm, 1785–1863）とヴィルヘルム・グリム（Wilhelm Grimm, 1786–1859）――は、一般的には「グリム童話」の作者として誤解されることが多いが、彼らは事実としてはドイツの昔話の収集家で、その成果が『子どもと家庭の昔話集』にまとめられ、「グリム童話」として知られている。ドイツ文学・語学研究（ゲルマニスティク、独文）の専門家のあいだでは、グリム兄弟は、現在も最大の規模を誇るドイツ語辞典、いわゆる『グリム・ドイツ語辞典』の作業者としても知られている。だが、多くの専門家（ゲルマニスト、独文学者）もグリム兄弟の仕事の全体像を知らない。

グリム兄弟の時代、19世紀のヨーロッパでは現在ほど学問が細分化されておらず、私たちの知る学問世界がまさに姿を整えつつあった。彼らは過渡期に生き、現在から見ればきわめて多面的な活動をおこなった。彼らの仕事は法、文学、言語、民俗、宗教、歴史にわたっているが、それはどのようなもので、彼らの研究を束ねている原理とは何だったのか。この問いを問題意識として、本稿では彼らの関心分野の全体を追いながら、彼らの仕事の統一的な理解を試みる。

1. 法

まずはグリム兄弟と法学との関係について考察しよう。

ヤーコプ・グリムは、当時の中等教育制度リツェウムを卒業したのち、進路を故郷カッセルのマールブルク大学に定めた。選んだ学部は法学部だった。その理由は込みいっていない。早世したグリム兄弟の父、フィリップ・ヴィルヘルムの専攻が法学だったのだ。ヤーコプ・グリムは「自叙伝」（1831年）で書いている。

> 「亡くなった父は法関係の人で、母も私が法学を専攻するのを望んだから、私はそのとおりにした。少年や青年が、自分が専攻する学問をこれだと心に決め、実際にそうするときに、その分野の真の意義を理解しているものだろうか。私も理解していない側の人間だった。それでも、私が父のかつての身分にこだわったのは、自然で無害なことだったし、賢明でもあった。もっと成長してから専攻を選べたならば、私はなによりも植物学をやりたかったと思う」

（JG 1879, 3–4）。

ヤーコプは、後年に弟のための追悼講演で語ったのと同様（JG 1879, 176）、ここで植物学への憧れを見せているが、彼がその人生の航路で、真剣に植物学者を志したことはなかった。私たちの時代の多くの大学生と同様、彼は実態に即したイメージもなく法学の世界に飛びこみ、そうして運命が決定された。19 世紀初頭、1802 年のことだった。

「マールブルクで、私はベーリングの「論理学」と「自然法」（いずれからも真の実りは得られなかった）、ヴァイスの「法学提要」、「学説彙纂」、果ては「ラテン語検定」までも、順に受講した。さらにエルクスレーベンの「学説彙纂」と「教会法」、ローベルトの「帝国史」、「国宝」、「封建法」、「実習」、バウアーの「ドイツ私法」と「刑法」も受講した。これらの授業のうち、私をもっとも惹きつけたのは、ヴァイスによる快活で学殖豊かな講義だった。エルクスレーベンの講義作法は、単調で時代遅れのものだった」（JG 1879, 5–6）。

多くの授業に不満とほどほどの満足を感じるなかで、彼は運命の出会いを体験する。教授陣のなかに、まだ青年のフリードリヒ・カール・フォン・サヴィニーがいたのだ。

「私はサヴィニーの講義に大いに感激した。それは私の全人生と研究に決定的な影響を及ぼしたのだ、と言うほかない。私が聴講したのは、1802/03 年の冬学期の「法学方法論」と「法定相続論」（1802 年の夏学期に開講されていた彼の「遺言相続法」は、学友からノートを借りて筆写することで、補完した）、1803 年の夏学期の「ローマ法制史」、1803/04 年の冬学期の「法学提要」と「債務法」だった。1803 年にサヴィニーが『占有権について』を出版すると、私はこれをむさぼり読み、研究した」（JG 1879, 6）。

ヤーコプ・グリムは、熱心な学生としてサヴィニーから好意を得る。

「サヴィニーの当時の講義では、法の難解な条文が個別に分けられ、各受講者の課題になっていた。課題はまず自分で提出用紙に解答し、それから教室の前に出て、学友たちに検証作業を見せるのだった。私の最初の論述は、相続を補填することによって紛争を予防するという内容で、問題の中心は完全に把握できたし、適正な解答を提出した。その喜びがどれほど筆舌に尽くしがたく、私の学問に新たな熱意を与えてくれるものだったのか、語る必要はあるまい。これらの論述課題を契機として、私はサヴィニーの自宅を頻繁に訪れるようになった」（JG 1879, 6）。

他方、年子の弟ヴィルヘルム・グリムも、リツェウム卒業後は兄と同様に法学を専攻することに決め、兄を追ってマールブルクにやってきた。彼は受講する講義に関しても兄を追い、やはり

兄と同様、サヴィニーに夢中になった。ヴィルヘルム自身の「自叙伝」（1830 年）には、つぎのように書かれている。

「ぼくは兄と同じ教授陣を選び、受けた講義もほぼ同一だった。サヴィニーの好意を得たことは、自慢しても良いだろう。彼の講義ほどに強い印象を与えるものは、ほかにほとんどなかった。自由で溌剌、同時に穏和、落ち着きもあるというところが魅力的で、それでぼくの心は摑まれた。弁論の力ではない。弁論は一時的な幻惑力を有するものの、人の心を真に捉えることはない。サヴィニーは自由自在に話して、ごく稀に覚え書きに視線を落とすだけだった。彼の話には完全な明晰さがあり、言葉には胸中の確信が溢れていた。それなのに、ある種の抑制と中庸もあった。口先だけで派手なことを言っても、あれほどのことはできない」（WG 1881, 10）。

サヴィニーは、ヤーコプ・グリムより 6 歳、ヴィルヘルム・グリムより 7 歳年長に過ぎなかった。彼は、ヘッセンのフランクフルト・アム・マイン（以下、「フランクフルト」）出身で、15 歳にしてマールブルク大学で学び、ヘッセンを出たあと、イェーナ大学、ライプツィヒ大学、ゲッティンゲン大学、ハレ大学で学業を続け、1800 年に博士号を取得したばかりだった。グリム兄弟はこの直後の時期の、マールブルク大学で「私講師」と呼ばれる立場を得ていた彼と面識を得たのだった。

1804 年、サヴィニーはクレメンス・ブレンターノの妹クニングデと結婚し、新婚旅行を兼ねてパリへの調査旅行に出立した。すでにヤーコプと親しく交流していた彼は、文献収集のための助手として、ヤーコプをパリまで呼びよせた。1805 年 2 月 10 日付の書簡で、パリに到着した兄は、マールブルクの弟に書いている。

「サヴィニーは稀覯本を大量に購入、収集している。この件に関しても、今後は情報提供していきたいのだが、現状では収拾がつかない。これまで註釈学派からの抜き書きをしていただけだから、なんとも気楽な仕事をしてきたものだな、と思っている。でも、これからは手稿に向かわなくてはならない」（GrGri, 29）。

ヤーコプはサヴィニーに感化され、活字になっていない原資料を読みとく意気を高めた。「註釈学派」は、中世盛期にイタリアのボローニャを中心として集まった、スコラ学に影響を受けてローマ法を解釈した法学者たちを指しており、彼らに学ぶことはローマ法研究の伝統的な訓練だったのだが、ヤーコプはもはやそれに満足できなくなった。

この書簡と行き違いに、マールブルクの弟は、同月 12 日付の書簡で、兄に直近の法学の勉強について書いている。身辺に兄も最愛の師もいなくなり、心が寒々しかったはずだが、彼は兄に楽しい話題を提供しようと努める。

「教会法にはおもしろいものが幾らでもあるね。それについての資料を 1 点。きょうエルクスレーベンが言っていたことなんだけどね。「カトリックの信徒たちが、プロテスタントの紳士たちに、ある像を崇拝するように要求したことがあったそうだ。これに対する回答として、プロテスタントはそんな模造品なんか、どんなことがあっても認めないと、そのようなものへの不敬が罪だとはまったく考えないし、ましてや、そんなもののために秘跡が無くなることはありえようか、と言ってやったそうだ」(GrGri, 34)。

兄はパリで、超一級の文献を収集する魅力を初めて体験し、弟はカルヴァン派のプロテスタントとして、カトリックを笑いものにする逸話を兄と楽しもうとする。ここには、グリム兄弟の法への関わり方が、暗示的に示されている。兄は、手稿の法を集めて出版するようになり、弟は、法に関する文学的逸話を目ざとく拾いあげようとする(横道 2018, 34–37)。

ヤーコプは 1805 年 10 月 6 日に弟のもとに帰還した。その翌日付の書簡で、彼はサヴィニーに「私は断固として研鑽を進め、あなたの輝かしい手法を我が物としたいのです」(GrSav, 16)と抱負を語る。だが彼は、実際には法学の勉強から急速に遠ざかった。このときも弟は兄を追う。なぜ、彼らは法学を見捨てたのか。

最大の理由は、1804 年にフランス皇帝として戴冠していたナポレオンの治世だろう。その軍事力によってドイツの領邦諸国は圧迫され、いわゆるナポレオン法典が導入されて、従来の法制度は過去のものになった。法学を専門としてきたグリム兄弟にとって、学んだことを活用する機会が限定されてしまったわけだ。また別の理由として、この政治状況からドイツの民族意識が高揚し、兄弟もこれに煽られて、同時代的意義の強いことを究めたいと考えるようになっていた。

ヤーコプ・グリムにもヴィルヘルム・グリムにも、法学以上に文学研究が輝いて見えていた。それまで限定的にしか評価されていなかったドイツ語の古典的作品や民間伝承を世に知らしめること。実は、グリム兄弟の関心が法学から文学に移行する経緯にもサヴィニーが関与しているのだが、それについては別稿に委ねたい。いずれにせよグリム兄弟は揃って法学を投げだし、文学研究に打ちこむようになり、ヤーコプ・グリムが後年の講演で回顧したように(JG 1890, 464–465)、文学研究の未開の耕地を開拓していった。

1807 年 3 月 9 日付の書簡で、ヤーコプは師に「私は近頃、法学の研究をやめようと決意しました」と打ちあけている(GrSav, 28)。彼はその心境を「立法は、哲学や文学のような汲みつくすことができない根底的なものではありません」(GrSav, 28)と書く。また、サヴィニーに従って取りくんできたローマ法の研究が、干からびて見えてきたことを隠さない。

「解明されるべきことを発見し、究明し、叙述する。そういうものだけが学問と呼ぶにふさわしいのです。すでに解決され、解明されたことを認識するだけなら、学問ではありません」(GrSav, 29)。

当時、つぎからつぎへと新しい発掘が報告されていたドイツ文学の世界と異なり、ローマ法の研

究は、すでに高い水準にあった。それがヤーコプ・グリムの心を掻きたてない。師がローマ法の研究を歴史的見地から進めていたことに関しては、弟子は共感を示し、「法学は、その性質ゆえにもっぱらローマ史の一部においてのみ研究することができるのです」（GrSav, 29）と、師に教えられたままを反復している。だが究極的には、彼は「いまは詩と文学全般の歴史の研究に、気持ちが傾いているのです」（GrSav, 30）と本心を語る。

ヤーコプがこの書簡を書いた翌 1808 年、サヴィニーは、現在のミュンヘン大学の前身のひとつになったランツフート大学に正教授として招聘され、直後、プロイセンからも招聘されて、1810 年、創立されたばかりのベルリン大学の正教授に着任した。ヤーコプ自身は、先に引用した書簡の年、1807 年に、文学研究者として活躍を始める。ところが 6 年が経過すると、事態は当初のヤーコプの見通しから転回する。『新約聖書』の「ルカによる福音書」第 15 章で、救世主イエスは「放蕩息子」についての譬え話を語るが、その譬え話のようにして、彼は法学に復帰してしまう。

ドイツ文学者としての活動が軌道に乗り、『エッダの歌』というノルドの文学とも格闘していたころ（横道 2015a, 31–35）、1813 年 12 月 24 日付の書簡で、ヤーコプ・グリムはサヴィニーに書く。

> 「このところ私は古ドイツの法のためにノートを取っています。たくさんの定型表現や慣用句を抜き書きしているのです。そのうちにノルドの法も読みとおし、研究するつもりですが、そのときには新しい良質な何ごとかを引きだせるのかもしれません。法があれほどにも文学的だったことは、ほとんどありません。ですが、古ドイツの法はまさに文学的で感受性を重視しているからこそ、最高度に実用的でもあったのです」（GrSav, 149）。

ヤーコプはドイツとノルドの文学の研究をつうじて、ローマ法ではなくゲルマン法を研究するという目的を発見し、法学に復帰したのだった。文学的な印象を与える古い法の世界は、それが実際に存在したという事実が驚異だと感じられ、「最高度に実用的」とすら思えた。

1814 年、ナポレオンが失脚し、フランス皇帝を退位した。解放されたドイツでは、ナポレオン法典を廃止するとしても、その後の法制度をどのようにするべきかが議論された。アントン・フリードリヒ・ユストゥス・ティボーは、ドイツに統一的な民法典をすぐさま導入すべきだと主張し、これに対してサヴィニーは、ティボーの提案は時期尚早であって、いまはまだ法制史の研究に集中するべき段階だと主張し、いわゆる「法典論争」が勃発した。

サヴィニーは同年中に小冊子『立法と法学に対する私たちの時代の使命について』を執筆し、刊行前にヤーコプに意見を求めた。サヴィニーは書く。

> 「まず歴史資料を見ると、民法はその民族の言語、習俗、憲法と同様、すでに民族固有の一

定の性格を有している。そう、これらの現象は個別のものではなく、民族ごとの諸力や活動の結果だ。これらの現象は、自然の内部で不可分に結合しているものの、私たちの観察の結果として、特殊な現象として出現する。それらの諸現象をひとつの全体へと結びつけるものは、民族の共同の定見だ。その定見とは、偶然的かつ恣意的に発生するようなあらゆる思惟を締めだす、内的に要求された同一の感受性だ」(Savigny 1814, 8)。

サヴィニーは、それぞれの民族には固有の未分化な潜勢力が宿されており、それが言語、習俗、法として表面化してゆくという、いささか神秘主義的な法観念を披露する。全面的に共感したヤーコプは、1814 年 10 月 29 日付の書簡で、つぎのように応答する。

「法は、その起源と有機的に生動する全身運動に依拠すれば、言語や習俗と同様、民族に即しています。法を言語や習俗から分けて考えることはできず、これらはすべて、人間を超えたひとつの力によって、奥底で互いに通じています。ゆえに言語や詩を案出しようという目論見は、そもそも馬鹿げています。同様に人間は、その一面的な理性によっては、ひとつの法すら発見できません。法は爽やかで穏やかに、さながら大地で繁茂するようにして存在します」(GrSav, 172)。

ヤーコプ・グリムは、法の問題を自身が新たな専門とした文学の問題に関係づけ、得意の植物イメージを交えて、師と自身の意見の総合を試みる。

サヴィニーの小冊子には、さらにつぎのような一節もある。

「文化の上昇に伴い、民族のあらゆる活動は分化する。かつて共同で営まれたものが、いまや個々の身分に分かたれる。法学者も、そのように分化した身分として出現した。法は言語の内部で自己形成し、学問的方向性を取る。法は、かつて民族集団の意識のうちにあったが、いまや法学者の意識のうちにある。民族の機能は、法学者によって代表されるものへと変化した。それ以来、法は技巧的で錯雑なもの、二面性を有するものになった。つまり法は、一方では民族の生活全体の一部であることをやめてはいないものの、他方では、法学者の専門的な学問になっている」(Savigny 1814, 12)。

サヴィニーは、文明の発展によって、民族全体で共有されていた諸課題が職種ごとに細分化された過程に注目する。現代の法は、一面では社会全体に関わるものでありながら、一面では法律関係者に独占されるものでもある。サヴィニーはこの二面性に対して、独自の呼称を設定する。

「私たちは民族の生活全般と法との関係を、法の政治的要素、そして法の専門的で学問的なありようを法の技術的要素と呼ぶ」(Savigny 1814, 12)。

日常生活に関わるものとしての法が「政治的」と呼ばれるのは、ヨーロッパの諸言語で「政治」を意味する語（ドイツ語では〈Politik〉）の語源が、「市民」を意味する古代ギリシア語の〈πολίτης〉（ポリテース）だから、すなわち「市民生活」に関するものに「政治」を見ることができるからだろう。他方、「法の政治的要素」の対義語は、法が学問世界の術語によって語られるものでもあるために、「法の技術的要素」と呼ばれる。

ヤーコプはサヴィニーに対する応答で、法のこの二側面にも反応し、自分がすでにドイツ文学研究として「古い民衆文学」と「後世の職匠歌人の民衆文学」について論じたこと（JG 1869, 12–21）を引き合いに出して、師と自分の見解の一致を主張する。

> 「職匠歌人の民衆文学はひとつの技巧、古い民衆文学はひとつの自然性と呼んでも良いのです」（GrSav, 173）。

法は政治的なものから、政治的でも技術的でもあるものへ、文学は自然性を宿したものから、技巧的なものへと変質した。だが、サヴィニーは一面的だった法が二面的になったと語り、ヤーコプは文学の単純な変質を語っているのだから、両者の主張が一致していると考えるのは、あくまでもヤーコプの幻想なのだ。

1815 年になると、ヤーコプは論文「法の内部の文学について」を発表する。この年、サヴィニーは主著『中世ローマ法制史』の刊行を始め、また自身が主張する「歴史法学」の牙城として機関誌『歴史法学誌』を創刊する。サヴィニーが法制史家として一時代を築くようになったのに平行して、ヤーコプも法制史家として出発する。『歴史法学誌』第 2 号に掲載された論文で、彼は宣言する。

> 「法と文学がひとつの苗床から並んで生まれたということを信じていただきたい」（JG 1882, 153）。

ヤーコプ・グリムの趣旨は、法と文学が古代社会において同根の存在だったことを明らかにすることにある。前年にサヴィニーに宛てて書いたことが、彼なりの法思想として結実したのだった。

> 「歌は詩人たちの占有物ではなかった。歌手たちは、単に歌をほかの者よりも立派に、忠実に歌うことができる者たちに過ぎなかった。同様に、法が裁判官たちの威信から生まれたことはなく、彼らは新しい法を作ることを許されていなかった。のちに、歌手が歌という財産の管理者になり、法学者が法に関する職責と任務を分担する者になった。当然ながら、文学と法は古い時代には互いに証明しあうもの、補完しあうものだったと見なさねばならない。文学と法は、民族の風習や冠婚葬祭に密接に関わっている。このことに関しては、結婚や葬送の儀式や形態が、なによりも説得的な実例を与えてくれる」（JG 1882, 154–155）。

歌や法が、元は民族全体に共有されていたが、社会の発展によって専門的な職能によって管理されるようになった、というこの主張は、まさしくサヴィニーがあの小冊子でおこなった主張を反復したものだ。現在でも冠婚葬祭という特別な機会に、昔ながらの儀式をとおして古い時代の価値観に触れることができる、そこに過去の法のあり方が仄めかされている、とヤーコプは主張する。

この論文で、ヤーコプは古い法制史料に含まれた文学的表現にも注目を促す。13 世紀から 15 世紀にかけて使用された古フリジア語の法集成『裁判官の書』には、〈helfend and haltend〉（助けることと支えること）、〈wind and wetir〉（風と水）、〈schott end schield〉（剣と盾）、〈betenth en betimbrath〉（行為と挙動）、〈friendefreesch〉（自由で溌剌）といった頭韻や脚韻を踏んだ対句表現が見られる。13 世紀から 20 世紀までの長期にわたってドイツ法に影響を及ぼした『ザクセン法鑑』にも、〈gut oder gelt〉（財産または金銭）、〈schuld und schaden〉（罪と害）、〈halten oder haben〉（維持することと所有すること）、〈mage und mann〉（娘と男）といった、やはり頭韻や脚韻を踏んだ対句表現が見られる（JG 1882, 161）。彼は、法の条文が韻律豊かに記されていたことに注目し、それを法の内部に文学的精神が息づいていた証拠と見なしたのだ。

追放宣告のように過酷な内容の法令も、後世から見れば文学的に見える。ヤーコプ・グリムは、つぎのような実例を挙げる（ただし、出典は明示されていない）。

> 「我らは汝を裁き、警告し、ありとあらゆる権利を奪い、権利なきようにする。我らは汝の妻を知恵ある未亡人に差しだし、汝の子らを法によって保護された孤児たちに差しだし、汝の小作地を貸しだしていた領主に差しだし、汝の肉体と血肉を空の鳥、波間の魚に差しだす。街道の利用に関しては、我らは汝にすべてを許す。街道では、誰もが平和と保護を得て良い。汝は何も持たぬ者になる。我らは汝を、この世の四方の街道へと差しだす」（JG 1882, 168）。

ヤーコプは、法の条文が数字を利用するときでも、文学的精神が混入していると主張する。『ザクセン法鑑』には、つぎのようにある。

> 「あらゆる動産に関して、相続人の許可なく、いかなる場所でも与えたり、財産を委ねたりして良い。ただし、つぎのことが条件になる。その者が、一振りの剣と一個の盾を身につけた上で、馬と鐙を押さえてもらう以外に人の手を借りず、高さ 1 ダウメレの石または切株から馬に跨ることができるということ」（JG 1882, 176）。

論題の「法の内部の文学について」が語るように、ヤーコプ・グリムは、この論文によって文学研究者でありながら法学者でもあるという自身の立場を肯定できるようになり、以後は死ぬまで法制史の研究に関わった。

この論文から 26 年後、1841 年にグリム兄弟はサヴィニーらの尽力によってベルリン大学に

招聘され、ともに正教授の職を得た。同年 4 月 30 日、ヤーコプ・グリムは就任講演をおこなったが、それは法学を主題とするものだった。そこで披露された彼の法に対する考え方は、青年期に法学から決別したときの思いと、法学に復帰したときの思いとが総合されたものになっている。

ヤーコプは一応は、長年の恩人にして、講演の聴衆でもあるサヴィニーの顔を立てて語る。

> 「新しい立法が、形式面および内容面でローマ法と同じくらい完全だという時代が来るのは、ましてやローマ法を凌駕しているという時代が来るのは、まだ先のように思われます」（JG 1890, 549）。

だが、そのような遠慮が話の枕に過ぎないのは、彼のいつもの流儀だ。彼は熱烈に弁護したい対象に、すぐに話題を移らせる。

> 「ドイツ法は私たちには粗野で、ほとんどまったくの断片としてのみ伝承されています」（JG 1890, 549）。

34 年前の書簡で、ヤーコプは古いドイツ文学を念頭に置いて、「いまは詩と文学全般の歴史の研究に、気持ちが傾いているのです」と語り、ローマ法には新たな研究の余地がなく、ドイツ文学にはそれが豊富だと感じていた。いまや彼は古いゲルマン法──ヤーコプはしばしば「ゲルマン」を「ドイツ」と呼んだため、これを「ドイツ法」と呼んでいる──を念頭に置いて、同様のことを語っている。

> 「ローマ法は、法源を開示してくれることはいまでは希少ですし、あったとしても、ほとんど学説や学問的訓練に回収されています。それに対してドイツ法では法源が溢れているのです」（JG 1890, 550）。

ゲルマン法はローマ法に比べれば不完全で、資料も整備されていないが、それゆえに「法源」、すなわち法の執行に関する実例に研究の余地があるという論理だ。ヤーコプは、さらに主張する。

> 「最古級のドイツ法は野蛮だと思われていますが、誤解です。それらは独自で、溌溂としていて、民衆生活の最初期の性状がどのようなものだったかという眼差しを私たちに与えてくれます。しかも、それは私たちの祖先だけの事情ではなく、ほかの民族でもそうだったと分からせてくれるものです。ですからドイツのことを学ぶことによって、ローマやギリシアがどのようなものだったのかということについても、有意義な知識をたくさん得ることができます」（JG 1890, 550）。

自分たちの民族系統の古い法を学ぶことは、民衆生活、すなわち民俗について学ぶことであって、

それは古い時代に関する普遍的な知識に繋がる。そのような論理で、ヤーコプ・グリムは法学的ゲルマニスト（日本では通例、複数形の「ゲルマニステン」）として、ローマ法の権威とサヴィニーを含む法学的ロマニスト（日本では通例、複数形の「ロマニステン」）に挑戦しようとする。

日本への影響ということに注目すると、ゲルマニステンとロマニステンを比べると、ロマニステンの影響力が際立って大きかった。穂積陳重はサヴィニーに、牧野英一はルドルフ・フォン・イェーリングに傾倒したが（堅田 2010, 135–194）、このふたりのドイツ人はロマニステンだった。ロマニステンは、19 世紀後半にドイツ民法典の編纂という機運をもたらし、日本の民法はこのドイツ民法典を「尤モ模範トセシ」ものとして形成された（梅 1896, 678）。明治時代の大日本帝国憲法がドイツ帝国の憲法を参考に編纂されたことは周知のとおりだが、その憲法が 1945 年の敗戦を経て形態を大きく変えたのに対して、民法典はいまだにドイツ民法典の影響を残している。

ヤーコプ・グリムを含めたゲルマニステンは、日本に対して限定的な影響しか及ぼさなかった。だが、たとえば『子どもと家庭の昔話集』で残酷な刑罰が描かれているのに接する際、私たちはゲルマニステンの研究活動に近づくことになる。そこでは、兄に比べると目立たない、ヴィルヘルムの法への関心にも接近することができる（横道 2018, 34–37）。

2. 文学

文学研究の世界では、ヴィルヘルム・グリムは兄と同様に華々しい栄誉を手にした。否、『子どもと家庭の昔話集』が、おおむねヴィルヘルムによって書かれたという事実があるため、彼は兄以上に成功したと言っても良いだろう。ここでは、彼らの文学研究が、どのような思想的基盤に支えられていたかを考察する。

ヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリムが傾倒した青年大学教師サヴィニーには、文学青年としての顔もあった。1850 年、65 歳のヤーコプ・グリムは論文「占有の言葉」の冒頭にサヴィニーへの献辞を掲げ、初めてサヴィニーの書架を見せてもらったときの感銘を記している。

> 「私はそれまで、教科書や父の遺品を除いて、ほんのわずかの書物しか知りませんでした。書物が通常の並びに配架された書架も、逆順に並んでいる書架もありました。まるでヘブライ文字を書くかのような流儀で、右から左へ並べられていたのです。私には、なぜそのように並べる必要があるのか不可解でしたから、どうしてこのようにするのですか、と説明を求めましたし、あれこれと言い訳するのを聞きましたね。梯子を登ってもっと近くで見ても良いと許され、まだ見たことがなかった書物を眼にしました。扉から見て右側の壁のずっと奥に、ボードマーの 4 つ折り版のミンネ歌集を発見したことを覚えています。私はその書物を初めて手にとりました。開いてみると、「ヤーコプ・フォン・ヴァルト」や「クリスタン・フォン・ハムレ」といった見出しがあり、異様で半分くらいしか分からないドイツ語の詩が

載っていました。私の胸は期待に膨らみました。その書物をのちに 20 回ほども通読することになろうとは、この書物なしにはどうにもならないと思うようになろうとは、予想もできませんでした」（JG 1879, 115–116）。

名前が挙がっているヴァルトやハムレはミンネ歌謡の吟遊詩人たちだ。サヴィニーが古典的なドイツ文学を集めていたのは、時代の流れを受けてのことだった。中世ドイツ文学の復権（Koziełek, Gerard 1977, 1–43）は、詩人マルティン・オーピッツらが 17 世紀に先駆的な役割を果たし、18 世紀に文献学者ヨハン・クリストフ・ゴットシェートがこの仕事を引きついだのだが、ヨハン・ヤーコプ・ボードマー（引用で言及された歌集の編者）やヨハン・ヤーコプ・ブライティンガーらスイス派は、中世の文学を古典としてではなく情熱的な新しい文学として捉えなおそうとして、ゴットシェートに対立した。このスイス派の立場が、ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーや初期のゲーテに受けつがれ、さらにゲーテを信奉した若い作家たち（シュトゥルム・ウント・ドランク、ロマン派）に受けつがれた。

ヴィルヘルム・グリムの「自叙伝」では、サヴィニーを介した文学体験が、別の場面に即して語られている。

「サヴィニーによる刺激は、講義だけではなかった。ぼくは彼のおかげで、研究にあたって歴史的に考察すること、正確な方法を用いることの意義を知った。どれほどありがたかったことだろうか。このことを知らなかったら、ぼくはまともな道を進めなかっただろう。それに、講義以外のいろんなものをつうじて、ぼくたちの感受性は開かれた。サヴィニーの蔵書からぼくたちの家に貸しだされた書物は、数えられないほどだった。彼はときどき朗読を披露してくれた。書物は『ヴィルヘルム・マイスター』の一節や、ゲーテの歌謡だった。その朗読は優美で、あの様子がぼくの記憶のなかでいまなお生き生きとし、まるで昨日の出来事のように感じられる」（WG 1881, 10–11）。

ゲーテとサヴィニーには 30 歳の年齢差があったが、いずれもフランクフルトの出身だから、その傾倒ぶりには身びいきのようなものがあったかもしれない。もっとも、ゲーテに対する熱狂的な共感は、1770 年代以降、多くのドイツ青年を捉えていた。

グリム兄弟は、サヴィニーに劣らずゲーテに夢中になった。晩年、ヤーコプ・グリムは、弟のための追悼講演で語った。

「若いころ、ヴィルヘルムの読書は、単に安らぎを得たり気分を軽くしたりするためのものではなく、彼は心奥からの衝動に駆られていました。彼はドイツの偉大な詩人たちの作品を読んでいましたが、じきにきっぱりとゲーテへ向かいました。私の場合は、読書に関して弟ほどの脈絡を有しておらず、読書三昧というわけではありませんでした。私は初めはシラーに惹きつけられましたが、次第にやはりゲーテに感銘を受けるようになったのです」（JG

1879, 166)。

1805 年 3 月 1 日付の書簡で、ヤーコプは弟に書いている。

「私たちの傑出した蔵書について語りあおう。きみはゲーテの新しい作品集の第 1 巻と第 2 巻を、もう注文して手に入れたかい。だとすると第 2 巻にはどのような詩が載っているんだね。それぞれの著作集の収録内容に、私はかなり要領を得てきた。まずウンガー社が出した全 7 巻の著作集については、私たちの知識は万端だ。つぎにゲッシェン社が出した全 8 巻の著作集だが、この第 8 巻を、サヴィニーはパリまで持ってきている。添付した紙に内容を記載し、私が特に好きな作品には下線を引いておいた。いくつかの作品は最新版の第 2 巻にも収録されているのではないかな。ゲッシェン版の第 8 巻に収録された作品の一部が、ウンガー版の第 7 巻にも収録されているからで、それが今回の版では第 2 巻に収録されるのではないかと思うのだ」(GrGri, 42)。

ライプツィヒのゲッシェン社は 1787 年から 1790 年に『ゲーテ著作集』全 8 巻を、ベルリンの J. F. ウンガー社は 1792 年から 1800 年に『ゲーテ新著作集』全 7 巻を刊行していた。この書簡が書かれているときには、テュービンゲンのコッタ社が全 13 巻の新しいゲーテ著作集を刊行しているところだった。この 3 種類の著作集をめぐって、異郷にいるヤーコプは、弟と文学愛好家らしい話題を楽しもうとしているのだ。彼はさらに書く。

「ウンガー版には、私たちが別個に所有している作品(『タッソー』、『イフィゲーニエ』、『ファウスト』、『エグモント』)のほかに、ゲーテの初期の作品、つまり『ヴェルター』、『ベルリヒンゲン』、『クラウディーネ』なども収録されている。――もしも、まだ予算があるのならば、私としては特に『ヴェンヴェヌート・チェリーニ』と『アレマン歌謡集』(カールスルーエで 1803 年かその翌年に出たもの)を手に入れたい。これらは手頃な価格だし、両作品ともサヴィニーが称賛していて、私自身も評価しているのだ」(GrGri, 42)。

この 49 年後の 1854 年、ヤーコプ・グリムは『グリム・ドイツ語辞典』第 1 巻序文で、ゲーテ通としての自負を辞典に込めたことを語っている。

「入念な作業を経て、ゲーテの著作は網羅的に利用することができた。ゲーテから少し削るくらいならば、ほかの著述家から多く削る方が良いだろう」(BG 1984, XXXV–XXXVI)。

グリム兄弟のゲーテ愛好は、青年期から老年期まで持続するものだった。ヤーコプの言葉遣いに関して、ゲーテが愛用した語がたくさん混ざっているという指摘もある(Denecke 1971, 104)。

ヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリムは、ともに青年期に、ゲーテやシラーにかぎらず、

同時代のさまざまな作家に関心を抱いていた。彼らの書簡では、友人だったアルニムやブレンターノはもちろん、ノヴァーリス、ルートヴィヒ・ティーク、ジャン・パウル、ハインリヒ・フォン・クライストらロマン派の詩人や作家が話題の種になっている。兄弟のうち、ヤーコプ・グリムに関しては、このような関心は年を取るとともに、顕著に衰退した。弟に関しては、兄ほど関心は衰えなかったが、しかし兄弟ともに、同時代の文学作品よりも古い時代の作品に対する関心が、比重を増していった。新しい書き手に世代間の感覚の落差を感じるようになったという理由もあるかもしれないが、グリム兄弟にとっては、未来よりも過去に向かって開拓すべき新天地が広がっているように思われたということが大きいだろう。また一般的に言って、ドイツ文学は 1760 年代末から 19 世紀初頭にかけて国際的に脚光を浴びるほど興隆したのち、19 世紀末になるまではかつてほどの勢いを持たなかったから、このことも彼らの「同時代文学離れ」の理由として、勘案されて良いかもしれない。

グリム兄弟は、一般にヘルダーの後継者と言われるし、このことはどこまでも強調されて良い。だが、彼らにとって直接の出発点になったのは、むしろティークの仕事だった。ヤーコプ・グリムは「自叙伝」で、1803 年に刊行されたティーク編纂による『シュヴァーベン時代のミンネ歌謡』を読んで、その序文に「胸が高鳴った」ことを報告している（JG 1879, 6）。ティークはつぎのように書いている。

> 「真の文学史は、ある精神の歴史だ。だから真の文学史は、つねに実現不可能な理想に留まるだろう。だが、どのような観察者、文学愛好者にとっても、みずからの見解を提示すること、その愛情を言葉として紡ぐことは可能だ。そうして古くからの誤解を解きほぐす、あるいは文学を理解している人々を、ゆっくりと澄んで自由な展望へと導いてゆく。そのようにして、古い時代は新しい時代を補完するし、逆に新しい時代が古い時代を補完するかもしれない」（Tieck 1803, II–III）。

「ある精神の歴史」と訳した個所の「精神」（Geist）は、ヨーロッパのほかの原語でもそうであるように（英語ならば〈spirit〉）、キリスト教の聖なる「霊」、民間伝承の「精」、人間の内面の総体としての「精神」を広く含意する。ヤーコプ・グリム、あるいは弟のヴィルヘルムもだが、彼らの信仰心に鑑みれば（6. を参照）、彼らはティークのこの文学観に、神の「霊」の歴史、すなわち「神慮」としての文学史を見た可能性が高い。「古い時代」と「新しい時代」が相互に補完的な関係にあるという見解も、神の天地創造が終末世界での神の勝利によって完結するというキリスト教の教説に引きつけて読むことができる。

また、ティークがつぎのように述べていることは、そのままグリム兄弟の課題として受容された。

> 「イタリア語、スペイン語、ドイツ語、英語、そしてノルド文学の成立をとおして、またそれを認識することで、古代の状況をもっと正確に把握しなければならない」（Tieck 1803,

III)。

古い文学作品が、古い時代を知るための鍵になる。ヨーロッパで、さまざまな文学作品が言語の違いを超えて影響を与えあってきたことを考えるならば、言語横断的な方法で文学史を理解しなければならないというのが、ティークの、そしてグリム兄弟の文学観の根底にあった。

ティークがグリム兄弟に伝えた見解は、ヘルダーの受け売りと言っても良いが、これについては別稿に委ねたい。グリム兄弟はヘルダーから直接的にも、ティークを介した形で間接的にも、ヘルダーの後継者だった。

ティークがつぎのように書いたことは、グリム兄弟を充分に煽った。

> 「以前は、いまほど古い時代の著作が読まれ、翻訳されたことが決してなかった。シェイクスピアを理解し、賞賛する人は、もはや稀ではない。イタリアの詩人に愛好家が付いている。スペインの詩人はドイツでどこまでも熱烈に読まれ、研究されている。カルデロンの翻訳は影響力最大のものと言えるだろう。フランスのプロヴァンス地方の歌謡、ノルドの物語詩、インドの想像力が咲かせた花は、私たちにとって、もはや違和感のあるものではなくなりつつある」(Tieck 1803, IV)

ヤーコプもヴィルヘルムも、諸言語で書かれた文学作品の比較研究によって、ドイツの民衆文学が世界の民衆文学のなかで、どのような位置付けを有するかを考究することを終生の課題に定めた。さまざまな言語の文学を理解することで、自分たちの文学の位置づけを、適正に理解できるようになる。ティークは、外国語の文学作品がドイツで熱心に受容されている状況では、現在のドイツ語とは異なる仕方で書かれた、その点で外国文学のような側面がある、自国の古い文学を読む機会が増えても良いのではないかと訴え、これにグリム兄弟は生涯をかけて応答した。

ヤーコプは、1812 年 10 月 29 日付の書簡でアルニムに書いている。

> 「私が感じているのは、私のすべての仕事の基礎は、ある大きな叙事的文学が、どのように地球上に広がって覇権を打ちたてたかということを学び、提示することにあるということだ。叙事的文学にはそのような過去がありながら、人間に忘れられ、ひどい扱いを受けている」(GrArn, 234–235)。

ティークは「ある精神」の歴史について語っていたが、ヤーコプはこの書簡でそれを「ある大きな叙事的文学」の歴史へと変換する。その 3 年前、1809 年 3 月 15 日付の書簡でヴィルヘルムは、サヴィニーに対して、すでにティークの計画を実行に移していることに言及している。自分たち兄弟は「いま大きな仕事に取りくんでいます」(GrSav, 67) と彼は書く。

> 「言い伝えの多くには、ほとんど永遠の生命があります。それらは、すでに太古の時代に存

在していたのに、形や枠組みを永遠に変転させながらも、確固として枯渇することなく、あらゆる時代をとおして進歩してきたのです」（GrSav, 67）。

ティークの「ある精神」の歴史は、ここでは「言い伝え」の「永遠の生命」に変換される。その先に書く内容も、ティークがかつて書いたことの焼き直しだ。

「ぼくたちはいまこそ、言い伝えの来し方と行く末を知らなければなりません。すべての時代の国民文学のあらゆる記念碑を、つまり聖書を、ホメロスを、ヘシオドスを、『千夜一夜物語』を、あらゆるノルドの文学を回顧し、修復し、抜粋しなければならないということです。その上で、改めて古ドイツ文学を通観するのです」（GrSav, 67）。

世界各地の文学作品を展望する旅に出、そこから古いドイツの文学へと帰還する。ドイツの昔話を集めた『子どもと家庭の昔話集』も、この志操から生みおとされた。1812 年に刊行された第 1 巻の序文で、ヴィルヘルムは書く。

「ドイツの昔話は、龍退治のシグルズに関する英雄伝説に遡るが、それだけで終わらない。それ以上のものだ。龍退治の伝説が全ヨーロッパに広まっているという事実は、この伝説に高貴な諸民族の親近性が開示されていることを教えてくれる。ノルドの人々の言い伝えのうち、これまでにドイツで知られているのは、デンマーク人の英雄詩だけだが、この英雄詩にも龍退治にまつわる多くの言い伝えが含まれている。それらの言い伝えは歌謡、つまり朗唱するためのものだから、子ども向けとは言えない。だが、子ども向けか否かという点は、伝承の区分に役立たない。歌謡と、歴史についての大真面目な伝説のあいだには、当然ながら、さまざまな共通点がある。英国にはタバートによる収集活動があるものの、それは充分に豊富とは言えない。ウェールズ、スコットランド、アイルランドには、なんと豊かに口承の言い伝えが現存していることだろうか。ウェールズのものは、すでに出版された『マビノギオン』だけでも真正の財宝だ。ノルウェー、スウェーデン、デンマークにも言い伝えは豊かに残っている。南の国々では、もしかすると北よりは少ないかもしれない。スペインの言い伝えはまったく知られていないが、セルバンテスを読めば、昔話は現存しているし、語りつがれていることは疑いないと分かる。フランスではシャルル・ペローが言い伝えを報告しているが、まちがいなく、もっと多くが残されているだろう」（BG 1812, XV–XVI）。

ティークの要請を自家薬籠中のものとしたヴィルヘルムは、このような熱烈な気概を持って、「グリム童話」の仕事に向かった。それは彼にとって生涯を費やした最大の課題になった。

本節では、グリム兄弟が古代ギリシア・ローマ文化に対して抱いていた反撥にも注目しておきたい。古代ギリシア・ローマ文化への同時代の熱烈な愛好は、グリム兄弟の文学研究にとって、いわば仮想敵の関係にあった。

中世ドイツ文学を再評価する 17 世期以降の機運は、それが高まっていた 18 世紀末から、水を差されることになった。18 世期後半、古代ギリシア・ローマの美的規範を重視する機運も高まり、ゲーテやシラーを中心とした古典主義がドイツの芸術界と思想界を席巻したのだ。グリム兄弟はゲーテの熱心な愛読者でありながら、この点でゲーテと決定的に断絶していた。

ヤーコプ・グリムは『ドイツ文法』第 1 巻初版（1819 年）で、サヴィニーへの献辞を掲げながら、古代ローマ文化を愛する師と対決しようとする。

> 「私たちの文学や言語の歴史は、いまはまだ貧相で、展開もしていないように思われます。しかし、それはいつかもっと多くを実らせ、もっと確固と根を張るときが来るかもしれません。それが、ギリシア語やラテン語を用いた学識に有益な影響を与えるということもあるかもしれません」（JG 1819, unpagiert）。

後年、ヤーコプはベルリン大学での正教授就任講演で、ドイツ法の研究は古代ギリシア・ローマの研究にとっても有益だと主張していたが（1. を参照）、法の問題と同じようにして、彼はゲルマン系の文法を研究する者として、ギリシア語とラテン語、それらの古典語を使って研究する分野に対抗意識を見せたのだった。

ヴィルヘルム・グリムも、1820 年に発表した論文「現在という時節のなかの古ノルド文学」で、兄と似た思いを吐露している。

> 「ギリシア人を模範として無条件にギリシアを崇拝する者が、いたるところにいる。彼らの存在がドイツでは空虚なギリシア模倣を煽ってしまったし、それによって多くのものが損なわれた」（WG 1883, 83）。

40 年近くが経った、1859 年の『シラーについての講演』でも、ヤーコプ・グリムは若い頃の思いを変えていない。

> 「自分を世界市民と見なし、外国から生まれたもの、古代ギリシア・ローマから生まれたものを賛美することもあります。ヨチヨチ歩きのころから、このお手本は監督者あるいは庇護者として、私たちの付き添いをしてくれました。嘘偽りなくこれ以上のものはございません、と告白を余儀なくされました。しかし私たちは、古代ギリシア・ローマのお手本と、私たちの固有の人生が要求する何かとのあいだには、いつも計りしれない溝がある、と感じてきたのです」（JG 1879, 376–377）。

最晩年の 1863 年に書かれた、『判告録』第 4 巻序文でも、ヤーコプの考えは変わらない。まるで遺言のようにして彼は書く。

「古代ギリシア・ローマの言語と文化の美、正確には卓越性は、疑いのないものだ。だが土着の言語と文学は長いあいだ虐げられ、壊されてしまい、それでも繰りかえし生命を取りもどし、立ちあがって、そのようにして魅力を増した。ギリシア語やラテン語の学識を出発点として、ドイツ研究には副次的に取りくむべきだろうか。ドイツ研究を目的として、ギリシア語やラテン語の学識を照明に用いたり、例示のために用いたりするべきだろうか。両者は、大いに異なる。古代ギリシア・ローマ研究を中心に置けば、そちらの規範が支配的になってしまい、土着の諸要素にも影響を及ぼす。ドイツ研究を中心に置けば、いくつかの新しい規範が生長し、それは古代ギリシア・ローマ研究の規範にも挑戦できるものになるし、少なくとも土着の諸要素の固有な特殊性を守ろうとする」（JG 1871, 452–453）。

古代ギリシア・ローマの文化規範に一定の敬意を払いつつも、それに対する愛好をドイツ文化の中心的な地位から転落させ、祖先ゲルマン民族の文化規範を過去から発掘し、回復すること。そこに、ふたりのグリム兄弟の最大の野心があった。ヴィルヘルムは青年期に、アルニムへの書簡で、兄は「いつも過剰気味」で、ヴィルヘルムには「分かっていても敢えてやらない、ということがあるのだが、兄さんは、それは正しくないと感じてしまうのだ」と兄弟の違いを説明していた（GrArn, 126）。古代ギリシア・ローマ文化への対抗意識に関しても、弟は兄ほど積極的にそれを表明しなかったが、彼のゲルマン民族の伝統に対する熱烈な思いを見ると（横道 2014a; 横道 2014b; 横道 2014c; 横道 2015a; 横道 2015b）、その思いは兄とほとんど変わらなかったように思われる。

ヤーコプ・グリムは一時的にであれ法学から距離を置いたし、ヴィルヘルム・グリムの法学への関わりは、兄よりもずっと控えめだったが（1. を参照）、サヴィニーは兄弟の文学研究を疎むどころか、推進する側の人間だった。グリム兄弟に先立って、彼はクレメンス・ブレンターノと交友を深めており、ブレンターノを助けるために、兄弟を文学研究の世界へと導いた（GrBre, 5）。ヤーコプとヴィルヘルムが文学研究によって、彼らの初の単行本をそれぞれ刊行したときにも、サヴィニーは好意的だった。

1811 年 4 月 9 日付の書簡で、彼はヤーコプの『古ドイツの職匠歌について』に言及する。

「ご恵贈に感謝いたします。すぐにでも、そして真剣に拝読いたします。いまの時代には文学関連の研究は希少なのですから、文学研究一般にも、あなたのお仕事とご計画のすべてに対しても、私は感心しきりです」（GrSav2, 68）。

この 3 か月後、7 月 8 日付の書簡で、彼はヴィルヘルムの『デンマーク語の英雄歌、物語詩、昔話』を絶賛する。

「グリムくん、なによりもあなたの素敵な書物に感謝いたします。すでに拝読しましたが、どれほど嬉しく読んだかは言えません。私には何もかもが腑に落ちましたし、これらの歌謡

は並外れて素晴らしいですね。あなたの翻訳は読む気が高まるものになっているし、序文は覇気に溢れています」(GrSav2, 76)。

1819 年、『子どもと家庭の昔話集』の第 2 版が刊行されたが、これに関して 1820 年 2 月 2 日付の書簡で、サヴィニーはヤーコプに書いている。

「昔話集の新版は、子ども、親、多くの友人たちのいずれにも、すでに大きな喜びです。この書物には絶えず多大な関心が寄せられていますし、繰りかえし読まれてもいます」(GrSav2, 266)。

グリム兄弟は、彼らが従事した学問分野の開拓者だったが、それはサヴィニーら理解者に後押しされて、進められたのだった。

当然かもしれないが、グリム兄弟の文学研究は、私たちの時代から見てきわめて低い水準にある。彼らの活躍は開拓者としてのもので、大成者としてのものではない。

ヤーコプ・グリムは、ミンネ歌謡と職匠歌について論じることで、その全研究の経歴を開始した。ドイツでは、宮廷の吟遊詩人たちが騎士たちの愛を歌うミンネ歌謡が 12 世紀から 14 世紀にかけて花開いたのだが、中世貴族の没落に対応して、この文化は衰退する。その後、ニュルンベルクなどで 15 世紀に、職匠歌人、つまり歌を仕事にする都市職人によって、職匠歌の文化が繁栄する。ヤーコプは書く。

「私が主張したいのは、ミンネ歌謡と職匠歌のあいだに作為に関する違いは皆無だということ、そして（もしかするとあらゆる）ミンネ歌人そのものが、本物の職匠歌人だったのだということだ」(JG 1869, 8)。

中世の貴族社会や初期近代の都市生活は、ヤーコプが高く評価する神話や民間伝承の対蹠物に思えたために、彼はそれらの意義を低く評価しようと企図した。その思いが先走って、ミンネ歌謡の吟遊詩人と職匠歌人を十把一絡げに扱い、区別する必要もない卑しいものなのだと決めつけてしまう。

グリム兄弟の時代、13 世紀に活躍した格言詩人フライダンクは未知の詩人で、ヴィルヘルムにはその正体が中世ドイツ最大の叙情詩人ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデだと思われた。

「ある程度まで詳しく調べてみるだけで、フライダンクとヴァルターの親和性は、その見解全般に見てとれるだけではなく、箴言や慣用句の大部が、こまかな言葉遣いにいたるまで一致していることが分かるだろう」(WG 1834, CXXIII)。

現在では、中世のこの両詩人を同一視する研究者はいないが、ヴィルヘルムはこの詩人の先駆的研究者として特別な思い入れを抱き、その思いが先走ってしまったのだ。

グリム兄弟の研究水準が、現在から見て不満を覚えるものだったとしても、それは彼らの開拓者としての意義を否定しない。開拓した者がいるからこそ、後世の者は実を摘むことができる。

グリム兄弟は「ゲルマニスティク」の第 1 世代の研究者だった。彼らの時代には、この学問分野はゲルマン語派の文学を全般的に扱うことができた。「ゲルマニスティク」は後年収縮し、「ドイツ語・ドイツ文学研究」を意味するようになったが、それは他方ではロマンス語派の文学および語学の研究「ロマニスティク」の発生を促し、スラヴ語派、ケルト語派、フィン・ウゴル語族、バルト語族に対しても、同様の働きをした（「スラヴィスティク」、「ケルティスティク」、「フィノウグリスティク」、「バルティスティク」）。さらに、「ゲルマニスティク」は、グリム兄弟の仕事を乗りこえる形で発展し、諸外国の文学研究の規範にもなった。日本でも、国文学（つまり日本文学研究）は、江戸時代までの国学などからそのまま連続しているわけではなく、ドイツに留学した芳賀矢一らが「ゲルマニスティク」を参考にして、現在の基本的な枠組みを構築したものだ（佐野 2001, 1–20）。

ヤーコプ・グリムにせよ、ヴィルヘルム・グリムにせよ、彼らの主張は、青年期から老年期まで大筋では一貫性を見せていることが多いが、細かく見れば、ほかの誰にも指摘できるように、彼らの見解はつねに震え、揺れている。ヤーコプによる『ドイツ神話学』の改定、彼の「教養」観や翻訳観の変遷、ヴィルヘルムによる『子どもと家庭の昔話集』の本文の改訂と注釈の内容や文体の変化などは、その「震え」や「揺れ」の反映と言って良い。

ヤーコプ・グリムは、青年期に文学作品は古いものほど優れているという幻想を抱いていた。『ドイツ文法』第 1 巻初版の序文で、彼は書いている。

> 「片側には抒情詩の充実と融通無碍さがあり、もう片側には戯曲の精神力がある。古い言語と文学の方が、純粋さと無意識性が強く、天国的起源にも近く、それゆえに偉大さも上なのだ。新しい言語と文学は、人間の手によって、貧弱で錯綜したものになった」（JG 1819, XXVIII）。

古い文学の代表は叙事詩と見なされ、充実し、融通無碍で偉大と評価される。新しい文学の代表は戯曲と見なされ、精神的だが、貧弱で錯綜していると評価される。

だが、老年期におこなった講演「言語の起源について」（1851 年）では、彼はかつての態度を軟化させている。

> 「ギリシア神話の多くは、エジプト神話によって基盤が築かれたようです。しかしエジプト神話はギリシア神話に匹敵しません。エジプト神話は種と果実を差しだすだけで、文芸の葉と花はまったく欠落しているのです。文学の全体では、叙事詩ほど基礎と発展が言語に近く、等しいものはありません。叙事詩も、簡素な土壌から私たちが驚くような上空へと駆けあがっ

たに違いありません。叙事詩、そして人間の創作および言語が生んだ高貴きわまる記念碑に関して、それは力強い形をしたものが世界から消失したあとで、かつてのものを弱々しく反映しているに過ぎないと考えるならば、あるいは残光なのだと考えるのならば、その人はほとんど何も言っていないのです」(JG 1879, 298–299)。

得意の植物イメージを駆使して、ヤーコプは文学が古ければ古いほど優れているといった、かつての彼自身がまさに主張していた文学観を否定している。

3. 民俗

グリム兄弟は法の内部に文学性を見ようとするが（1. を参照)、さらに言えば、彼らは法と文学の両方の内部に「民俗」を見ようとする。そもそも法は民衆の規範として民俗に関わるし、民衆文学は民俗を生き生きと伝える。グリム兄弟が法に関心を抱きつつ、文学研究に打ちこむことができたのは、彼らがなによりも民俗の息吹に魅せられていたからと言える。

民俗はいまなお生きたものとして日常生活に脈打っているが（たとえばインターネット社会には、インターネット社会の民俗がある)、その内実を探るためには、どうしても過去の民俗との比較が必要になってくる。グリム兄弟は、彼らを支配していた歴史的過去への憧れゆえに、民俗に惹かれた。

1843 年 2 月 24 日、ベルリンの学生が開いたグリム兄弟のための歓迎会で、ヤーコプ・グリムは古典的な文学の研究と「古事」、つまり古い民俗の研究を対照させて、前者への配慮をめぐらせつつも、後者が立ち遅れていることに不満を述べる。

「みなさん、古典の研究は私たちの自己形成の基盤です。古典の研究は私たちに、まったく人間的なものを示します。私たちが美を純粋に楽しもうとするとき、私たちはいつでも古典の研究に帰ります。古典の研究を抑圧することは決してできません。古典を研究することの価値は、減じられるべきではない。さて、ドイツの古事を研究するとしても、それは古典の研究を抑圧しようとするのではありません。ドイツの古事の研究は、当然の権利を得ようとするだけのものです。それは、一度追放された場所をふたたび確保しようとするだけなのです。私たちはさまざまな時代を体験しましたが、古典の研究が私たちを守れなかった時代があります。古典の研究が、私たちがその時代をやりすごす助けにならなかったということです。私たちは、私たちの民族の本質が何かということに向きあって、窮境を乗りこえました。ドイツの古事の研究は、どんな窮境でも私たちを助けてくれることでしょう。固有のもの、祖国に関するものは、私たちを力づけてくれるからです」(JG 1890, 464–465)。

一般に「ドイツ民俗学の父」と呼ばれるのは、グリム兄弟よりも下の世代の学者、ヴィルヘルム・

ハインリヒ・リールだ。グリム兄弟は、リールのさらなる先駆者という位置づけになる。筆者は以前、ヤーコプ・グリムの『ドイツ神話学』が後世にどのように受容されたか、その一端を考察した（横道 2015c, 32–46）。これはドイツでは民俗学史と宗教学史で考察される事項にあたる。さらに筆者は、グリム兄弟、特にヴィルヘルム・グリムによる昔話「茨姫」に対する解釈の後世の受容史についても研究したことがあるが（横道 2013a; 横道 2013b）、これは伝承研究の分野に収まる事項で、ドイツではドイツ語ドイツ文学研究（現代の「ゲルマニスティク」）と民俗学の両方で研究対象になる。

ヤーコプ・グリムの仕事のうち、民俗学に関する仕事として『ドイツ法古事集』の重要度は高い。この著作は、ゲルマン系諸民族の法に関する逸話を集成したものなのだが、フランスの歴史家ジュール・ミシュレによる『フランス法の起源』の下敷きにもなった。ミシュレは、フランス法の基礎的部分に、ゲルマン民族の慣習法を見出したのだが（堅田 1985, 143–179）、これはフランス人が言語的にはラテン系（ロマンス語派）に属するものの、民族的にはゲルマン系とその他の諸民族（ケルト系、ラテン系）の複雑な混交によって成立したという歴史的経緯を背景としている。

民俗学と法学が交わることで成立したヤーコプ・グリムの著作として、『判告禄』と題する膨大な著作もある。「判告」とは「法に造詣が深い男たちが現行の法に対して出した証言の集積」（Werkmüller 1972, 67）を意味し、中世や初期近代の村や町では、裁きがおこなわれる際に、そのような人々が召集され、共同体と領主の互いの権利と義務を確認した上で、現行の法の実際の運用を審議し、決定した（永田 2001, 1650–1655）。そのように民俗に根差した法の顕現を、『判告禄』第 4 巻の告知文でヤーコプ・グリムは述べる。

> 「判告録は、まだ抑制されていない爽やかで自由な法の発露だ。その法は民族そのもののもとで、慣習として生まれてきた。それはのちに法廷で聖別され、法と化した」（JG 1871,453）。

ヤーコプは、ゲルマン法の研究がローマ法の研究よりも優位にあるとする主張で、法源の豊かさを根拠に挙げていたが、まさにその法源の資料集を、彼は『判告録』として世に送りだしたのだった。この著作に刺激された形で、ヤーコプの死後、法学と民俗学に跨る分野、法民俗学が誕生した（クラーマー 2015, 294–295）。

4. 諸言語についての補説

2020 年のデータによると、話者が多い言語は、第 1 に英語の 12 億 6,800 万人、第 2 に中国語（北京語のみ）の 11 億 2,000 万人、第 3 にヒンディー語の 6 億 3,700 万人、第 4 にスペイン語の 5 億 3,800 万人、第 5 にフランス語の 2 億 7,700 万人、第 6 に標準アラビア語の 2 億 7,400 万

人、第 7 にベンガル語の 2 億 5,200 万人、第 8 にロシア語の 2 億 5,800 万人、第 9 にポルトガル語の 1 億 2,800 万人、第 10 にインドネシア語の 1 億 9,900 万人だという（SIL International 2020）。

各言語の内部には多様な分化と発展の歴史が収まっており、私たちはそれを系統関係にもとづいて分類することができる。日本語も含めて系統が不明な言語も稀ではないが、最大の話者数を誇る言語グループは、400 以上の言語を有する印欧語族（インド・ヨーロッパ語族）だ。上に挙げた 10 の言語のうちでは、中国語、アラビア語、インドネシア語を除く 7 つの言語がこの印欧語族に属し、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ヨーロッパの古典語として重要なギリシア語、ラテン語なども同様だ。ほかの語族としては、1,500 以上の言語を有する（とはいえ言語と方言の差はしばしば不明確な）ニジェール・コンゴ語族、1,200 以上の言語を有するオーストロネシア語族、中国語を含むシナ・チベット語族、アラビア語やヘブライ語を含み、かつてセム = ハム語族と呼ばれたアフロ・アジア語族などがある。

日本語の用語では、それぞれの「語族」は「語派」に下位分類され、それぞれの「語派」は複数のさらなる「語派」や、「語群」、「諸語」に下位分類される。分類に関する見解にも諸説あるが、印欧語族の場合は、おおむねアナトリア語派、インド・イラン語派、ヘレニック語派、イタリック語派、ケルト語派、ゲルマン語派、アルメニア語派、トカラ語派、バルト・スラヴ語派、アルバニア語派などに分けられる。ギリシア語はヘレニック語派、ラテン語はイタリック語派のラテン・ファリスク語群、イタリア語、フランス語、スペイン語はラテン語から分化したロマンス諸語、英語とドイツ語はゲルマン語派の西ゲルマン語群、ロシア語はバルト・スラヴ語派のうちのスラヴ語派の東スラヴ語群に属する。

グリム兄弟の関心の焦点は、母語ドイツ語が属するゲルマン語派に向けられていた。ゲルマン語派は、かつてゲルマン祖語から北ゲルマン語群、東ゲルマン語群、西ゲルマン語群の 3 種類の系統が分かれたが、東ゲルマン語群はすべて死滅し、現在は北ゲルマン語群と西ゲルマン語群が残っている。

北ゲルマン語群は、「古ノルド語」から発展した。「ノルド」は「北」（ドイツ語〈Nord〉、英語〈north〉）を意味し、古ノルド語は、現在のスウェーデン語、ノルウェー語、デンマーク語などに発展した。

ノルドは日本では漠然と「北欧」と呼ばれることが多く、ノルドの神話は「北欧神話」と呼ばれている。だが日本で「北欧」と呼ぶ場合、フィンランドは明かにその一角を占めるし、バルト諸国もしばしば北欧と呼ばれる。ところが、フィンランドの主要言語フィン語はウラル語族のフィン・ウゴル語派に属し、バルト諸国の言語のうち、ラトヴィア語とリトアニア語はスラヴ・バルト語派のバルト語派に、エストニア語はフィン語と同じバルト・フィン諸語に属している。つまり、これらの言語は「北欧」のものではあっても、「ノルド」ではない。

「ノルド」を「北欧」と訳すのは誤解の種になる。そのため、本稿では「ノルド」という語を用いる。「北欧神話」を「ノルド神話」と訳すたぐいで、これは異様と非難されるかもしれないが、この神話の多くの原典が書かれたアイスランド語では〈Norræn goðafræði〉、ノルウェー語では

〈Norrøn mytologi〉、英語では〈Norse mythology〉、ドイツ語では〈Nordische Mythologie〉と呼ばれているため、「ノルド神話」は実際には適切な訳語と言える。「北欧神話」が日本で「ノルド神話」等と訳されていたら、その地理的イメージは乏しくなり、現在ほど受容されなかっただろうということは筆者も認めるが、しかし誤解を助長することは望ましいと思えない。

グリム兄弟の母語ドイツ語は、正式には「新高ドイツ語」（Neuhochddeutsch）と呼ばれ、「高地ドイツ語の近代的な形態を意味している。これとは別の言語として、「低地ドイツ語」があり、「高地」はアルプスがあるドイツ南部を、「低地」は北海につづくドイツ北部を意味している。この 2 種類のドイツ語は、英語（正確には「現代イギリス英語」）、新フリジア語（フリジア諸語）、低地ドイツ語から分化した標準オランダ語などとともに、西ゲルマン語群に分類される。

ゲルマン語派を上に述べた 3 グループに分類する仕組みに、異論を唱える声もある。ゲルマン語派を北ゲルマン語群と、オーダー＝ヴィスワ川ゲルマン語（東ゲルマン語群に対応）、北海ゲルマン語、ヴェーザー＝ライン川ゲルマン語、エルベ川ゲルマン語（以上 3 種が西ゲルマン語群に対応）の 5 グループからできているという見解だ（清水 2012, 7–12）。

この 5 分類方式では、標準ドイツ語（新高ドイツ語）の源流、古高ドイツ語は、そもそも単一の言語ではなく、ヴェーザー＝ライン川ゲルマン語に属していた一部の言語グループとエルベ川ゲルマン語にまたがって属していた一部の言語グループの総称だったと説明される。他方、低地ドイツ語は古ザクセン語として古英語や古フリジア語とともに北海ドイツ語に属していたという。標準オランダ語は、古オランダ語（古低フランケン語）としてヴェーザー＝ライン川ゲルマン語に属していたグループを母体とし、エイセル川以北の方言（オランダ語低地ザクセン方言）のみが、低地ドイツ語などとともに北海ドイツ語に属していたという（清水 2012, 43–46）。

5. 言語

グリム兄弟は、ともに言語に関する仕事に打ちこんだが、言語学に分類される研究に従事したのは、もっぱらヤーコプ・グリムだった。ここではヴィルヘルム・グリムについては、ほとんど論及しないが、彼の言語観については、翻訳や昔話注釈の文体を通じて間接的に考察したことがある（横道 2015a; 横道 2015b; 横道 2014b）。とはいえ、辞書編纂は言語学関連の仕事と見なすこともできるから、これに関しては本節でもヴィルヘルムの貢献に言及する。

ヤーコプ・グリムが言語の研究に関心を抱いたことは、一般的に見て、それほど不可解ではないと思われる。現在でも文学に対する関心は、しばしば言語現象一般への関心に連絡する。だが、言語の系統関係（4. を参照）に関する研究がグリム兄弟の時代に急激に進展し、熱い注目を浴びていたという時代状況も見逃せない。

『旧約聖書』はおもにヘブライ語（ただし一部、アラム語）で執筆されたため、かつてのヨーロッパでは、ヘブライ語が人類の原初の言語で、他の言語はこの言語から分化したものと考えられていた。『旧約聖書』の「創世記」第 11 章には、かつて神に挑戦するような高い塔がバベル（バ

ビロンのヘブライ名）に築かれたが、それが破壊され、以後はそのような暴挙が不可能になるように、それまではひとつだった言語が分断されたと記されている。

グリム兄弟は、この前近代的な観念が是正されていく時代を生きた。1854 年 8 月 10 日、ヤーコプ・グリムは講演「語源研究と比較言語学について」で語っている。

> 「長いあいだヘブライ語は聖なる言語とも、誤解されて祖語とも見なされました。あらゆる語源研究の源泉は、ヘブライ語にあるという謬見が、残存していました」（JG 1879, 307）。

ヤーコプ・グリムにせよ、ヴィルヘルム・グリムにせよ、彼らは敬虔なキリスト教徒だっただけでなく、学問の進歩に帰依した人々でもあった。ヤーコプは語る。

> 「ヘブライ語はドイツ語の仲間ではありませんし、ドイツ語の研究に根本的な役割を果たすわけではありません」（JG 1879, 308）。

この講演の 68 年前、ヤーコプが生まれた翌年にあたる 1786 年、イギリスの言語学者ウィリアム・ジョーンズは、ベンガル・アジア協会でおこなった講演「インド人について」で、つぎのように述べた。

> 「サンスクリット語がいかに古くとも、そこには素晴らしい構造がある。それはギリシア語よりも完璧、ラテン語よりも豊穣で、どちらの言語よりも洗練されているが、動詞の語根と文法的形式の両方で、3 つの言語には偶然と思えない強力な類似性がある。この 3 種の言語を検証すれば、いかなる文献学者であろうとも、それらが、おそらくはすでに消滅した共通の源泉から派生したのだと考えずにはいられない。ゴート語やケルト語は、ギリシア語やラテン語ほど断言できるわけではないし、ほかの言語に由来する語が混交しているものの、やはりサンスクリット語と同じ源泉を有していたと思われる。今回の学会では古代ペルシア関係のことは無関係だが、これについて云々しても良いのならば、古代ペルシア語を同じ一家に加えることができるだろう」（Jones 1824, 28–29）。

ジョーンズはギリシア語、ラテン語、ゴート語、ケルト語などヨーロッパの古い言語が、古代インドのサンスクリット語（梵語）と共通の起源を有するという仮説を初めて提示したのだった。

この発見以降、印欧語族という観念、つまりインドからヨーロッパに広がる地理的空間で、伝統的に話されてきた言語の多くが同じ系統に収まるという見解が受けいれられていった。ジョーンズが想定した、それらの言語の共通起源は「印欧祖語」と呼ばれるようになった。

1808 年、ドイツのフリードリヒ・フォン・シュレーゲルが『インド人の言語と英知』を、1816 年、同じくドイツのフランツ・ボップが『ギリシア語、ラテン語、ペルシア語、ゲルマン語と比較したサンスクリット語の動詞変化体系について』を、1818 年、デンマークのラスムス・クリスティ

アン・ラスクが『古ノルド語あるいはアイスランド語の起原についての研究』を、そして 1819 年、ヤーコプ・グリムが、『ドイツ文法』第 1 巻初版を刊行した。彼らの活躍によって、1800 年代後半から 1810 年代後半にかけて、比較言語学という学問分野が急激に成長した。ヤーコプ・グリムに比べるとシュレーゲルは 13 歳年長、ラスクは 2 歳年少、ボップは 6 歳年少という関係にあり、シュレーゲルは年齢がやや離れているが、ラスク、ヤーコプ、ボップの 3 人は同世代に属し、いずれもまだ青年から壮年の年齢だった。

さて、ラスクとヤーコプ・グリムがそれぞれの書物を刊行したとき、時間的な間隔はあまり大きくなかったために、ヤーコプは遅れを取ってラスクの研究成果に接することになった。ラスクの書物を読んだヤーコプは、『ドイツ文法』第 2 巻（1826 年）を刊行する前に、第 1 巻を改訂するべきと判断し、1822 年に第 1 巻第 2 版を刊行した。ラスクは印欧語族の子音の変化には規則があるという発見をしていたが、これを法則化したものが、のちにドイツからイギリスに帰化した比較言語学者で比較神話学者のフリードリヒ・マックス・ミュラーによって、いささか不適切に「グリムの法則」と呼ばれるようになった音韻法則だ。

法の内部に文学を見た（第 12 節）ヤーコプは、言語の内部にも法を見た。1841 年 4 月 30 日、ベルリン大学の正教授就任講演でヤーコプは語る。

> 「法と言語には、包括的な類似性があります。私は、法と言語はともに古く、しかも新しいという点で、両者が一心同体の性質を持つと考えます。法と言語は古く究めがたい土壌の上に依拠していますが、絶え間なく爽やかに改まろう、生まれかわろうとする本能にも依拠しているのです」（JG 1890, 547）。

法も言語も人間を統制し、規範性に支えられた自由を提供するという点で共通する。日本語で「文法」という語があるように、言語は言語なりの法的規範によって動いている。また、法も言語もきわめて古い時代から存在し、歴史によってはぐくまれてきたものだという共通性もある。ヤーコプ・グリムにとって、自身の文法研究はあくまでもサヴィニーの弟子としておこなわれるものだった。そのため、彼の『ドイツ文法』第 1 巻初版は、サヴィニーへの献辞を掲げ、思い出語りをすることから始まっている。

> 「私は晴れて高等教育を受けたいという意欲を高め、マールブルクへやって来ました。あなたの授業を聴講し、あなたが教えてくれたことに、法学であれ、別の学問であれ、何かを研究するということにどのような意義があるのかについて、胸を高鳴らせることができましたし、それを理解することもできたのです」（JG 1819, unpagiert）。

ヤーコプにとって、比較言語学はサヴィニーに伝授された研究方式の応用だった。前もってこの献辞のことを伝えられていたサヴィニーは、1818 年 6 月 27 日付の書簡でヤーコプに書いている。

「歴史的な文法研究というあなたの計画は、まったく素晴らしいものです。計画を伝えてくれただけでなく、献辞を捧げてくれるとは、嬉しい限りです。なんとも勉強になる書物ですね。私の名前を掲げてくれることは実に光栄です」(GrSav2, 246)。

弟子が法学から文学研究に移ったときも、言語学にも手を出したときも、サヴィニーは寛大だった。

ヤーコプ・グリムの言語研究は、言語に植物イメージを見る彼の美的感性によっても推進されていた。1851 年 1 月 9 日の講演「言語の起源について」でヤーコプは語る。

「言語は、恵まれた状況で何物にも阻まれず、自由にあらゆる方向に広がっていく樹木のように、花を咲かせるのではないでしょうか。言語は、光や地面が不足している状況で苦しんで枯れざるを得ない農産物に似て、充分に成長していない段階で粗末に扱われると、死滅するものではないでしょうか」(JG 1879, 262)。

『ドイツ文法』第 1 巻初版の序文でヤーコプが書いたつぎの内容は、一見すると植物に無関係に見えるかもしれないが、そうではない。

「ドイツ語族のすべてが緊密な親縁関係にあり、現在の形態は、かつての以前の形態、古い形態、そして最古の形態へと遡らないと、理解できないということ、またどれほど理解できないのかということを証明する。これが私の主な目的です」(JG 1819, unpagiert)。

「ドイツ語族」は「ゲルマン語派」を意味する(1. を参照)。この「語族」(Sprachestämme)の「族」(単数形〈Stamm〉)には、植物の「幹」という語義もある。現在も、言語の系統はしばしば樹形図として表現されるが、ヤーコプ・グリムはまさにそのように、言語を複雑に枝分かれしてゆく大樹としてイメージし、言語研究にのめりこんだ。

私たちの日常を振りかえってみても、人はしばしば特定のイメージに固執することで、理性的思考が歪められてしまうことが気づかれるだろう。グリム兄弟が学術同人誌『古いドイツの森』第 1 巻(1813 年)を刊行したのは、ヤーコプが『ドイツ文法』第 1 巻初版を刊行する 6 年前のことだった。この当時、彼の言語研究は開始されたばかりだったのだが、その論述には、植物イメージに浸食された論理の歪みがよく現れている。

論文「花と葉の意味」には、つぎのような箇所がある。

「口(Mund)はラテン語で手(manus)だ。四肢や指は大枝と小枝だ。唇(Lippe)のラテン語は〈labium〉で、これは落ち葉(Laub)に当たる。舌は発話のときに解けたり結んだりする帯だが、帯(Band)とは結ぶもの(Binde)で、ラテン語の〈vitta〉、つまり植物の繊維に通じ、これがドイツ語では〈Weide〉、つまり牧草地に通じる」(BG 1813, 141–

142)。

ヤーコプ・グリムは語呂合わせによって、人間の発話行為を植物絡みの用語に関係づけようと無駄な努力をしている。年を経て耄碌した学者のような文章を思わせるが、実際には彼は 20 代前半の青年だった。

もっとも、この時期のヤーコプは語呂合わせにもとづいた語源論に夢中になっていて、危険な議論は必ずしも植物絡みばかりではない。前述した学術同人誌と同年、1813 年に発表された別の論文「神話、叙事詩、歴史についての考察　古ドイツの実例付き」で、彼はギリシア神話の英雄オデュッセウス（Ὀδυσσεύς、ラテン文字では Odysseus）がラテン語でウリセス（Ulysses）と呼ばれることに注目し、〈l〉と〈d〉の親近性を主張する。

「「ウルデュセス」（Uldysses）は「オルデュセス」（Oldysses）であるのなら、それは「ヒュレブラント」（Hullebrand）や「ヒレブラント」（Hillebrandt）に近い音で、つまりは「ヒルデブラント」（Hildebrandt）だ」（JG 1869, 82)。

音が近似していると感じられたということで、ゲルマン民族の英雄ヒルデンブラントが、ギリシア神話の英雄と同一だという珍説が主張されたのだった。

ヤーコプ・グリムのこのような思考回路は、1816 年の秋から冬にかけて、比較言語学の研究が徹底的になされることによって、是正された（Ginschel 1989, 67–69)。この結果として、1819 年に『ドイツ文法』第 1 巻初版が、その 3 年後に第 1 巻第 2 版が刊行された。第 1 巻第 2 版の序文には、つぎのように記されている。

「文法に関して、私は普遍的かつ論理的な諸概念に対して敵対する。そのような諸概念は、一見すると、自身の規定を厳格にし、内的に完結させているが、観察行為を阻害している。その観察行為こそ言語研究の魂だと私は考えている」（JG 1822, VI)。

科学精神にもとづいた実証研究に徹し、空理空論を避ける。そのようにヤーコプは宣言したのだった。

とはいえ、その宣言がどれほど達成されたかとなると、疑問が残る。先に見たような最初期の語呂合わせは影を潜めるようになった。それでも彼の言語論は、成熟した時期のものであっても、現在の私たちにはしばしば異様に見える。

実例として、先に言及した「グリムの法則」を見てみよう。ここで、ヤーコプは、『ドイツ文法』第 1 巻第 2 版で、つぎのような例を挙げている。ギリシア語の〈p〉はゴート語で〈b〉に、古高ドイツ語で〈v〉（あるいは〈b〉のまま）に対応する。ギリシア語の〈b〉はゴート語で〈p〉に、古高ドイツ語で〈f〉に対応する。ギリシア語の〈f〉はゴート語で〈b〉、古高ドイツ語で〈p〉に対応する。同様の事態が〈t〉と〈d〉と〈th〉（または〈z〉）の組み合わせと、〈k〉と〈g〉と

〈ch〉（または無音）の組み合わせにも観察される（右図、JG 1822, 584）。

gr.	goth.	alth.	gr.	goth.	alth.	gr.	goth.	alth.
P	F	B (V)	T	TH	D	K	. .	G
B	P	F	D	T	Z	G	K	CH
F	B	P	TH	D	T	CH	G	K

これはキリスト教の「三位一体」の理想が 3 種類の子音推移それぞれに発見されたことを意味する。容易に想像がつくように、この図式化はのちに観念的なものとして批判された。現在では、ギリシア語とゴート語に関する子音推移だけが残され、つまりギリシア語を含む印欧語族のなかでゲルマン語が独自に経験した子音推移だけが残され、かつ観念性が払拭された上で、ヤーコプ・グリムの定式は「ゲルマン語第 1 次子音推移」と呼ばれている。この法則では説明のつかない現象がヤーコプ没後の 1875 年、デンマークのカール・ヴァーナーによって指摘され、こちらは「ゲルマン語第 2 次子音推移」と呼ばれる（いわゆる「ヴェルナーの法則」）。

ヤーコプ・グリムは『ドイツ語の歴史』（1848 年）を自身の最良の書物と述べた（JG 1890, 461）。しかし、この書物では母音のうち〈A〉と〈I〉と〈U〉が根源的と見なされ、「言語のいたるところと同様に、母音でも三位一体が支配している」と明言されている（JG 1848, 274）。さらに、彼はこの現象の証拠としてこのように記している。

> 「3 つの性としての男性、女性、中性。3 つの数としての単数、双数、複数。3 つの人称としての 1 人称、2 人称、3 人称。3 つの態としての能動態、中動態、受動態。3 つの時制としての現在、過去、未来」（JG 1848, 274, Anm.）。

ドイツ語を含めて現在のゲルマン語派に双数という文法はないが、ゴート語など過去のゲルマン語派にはそれが存在したし、印欧語族を広く見れば、現在でもインド・イラン語派のインド語群などに双数が確認される。中動態はドイツ語では再帰表現によって取って代わられたが、ギリシア語やアイスランド語には残存している。つまり双数や中動態は、ゲルマン語派あるいは印欧語族の古い言語では一般的だったと想像され、その「三位一体」のあり方がヤーコプには根源的で本来的だと思えたのだ。

ヤーコプ・グリムは比較言語学で一時代を築いたが、現在の研究水準と比べれば、彼の主張には失望させられるかもしれない。ヤーコプの言語研究の実態を、ウルリヒ・ヴュスは皮肉を込めて「野生の文献学」と呼んだ（Wyss 1979）。だが、ヤーコプの言語研究に私たちにとって啓発的な要素はまったくないのだろうか。そうではない。彼の名誉のために、いくつかの類例を提示するべきだろう。

1822 年に刊行された『ドイツ文法』第 1 巻第 2 版は、従来の多くの書物と異なって、ドイツ語の特殊な書体「フラクトゥーア」（日本での通称は「ひげ文字」、「亀甲文字」など）を採用していない。私たちが「アルファベット」としてイメージする書体は装飾性が少ないローマン体なのだが、装飾性が高いブラックレターのうち、ドイツ文字と呼ばれるものの 1 種に、そのフラクトゥーアがあり、20 世紀前半までのドイツ語の文献を渉猟すれば、私たちはこのフラクトゥーアと付きあわないではいられない。ヤーコプ・グリムは上述した書物でこの書体の採用を停止し、以後の著作でもその方針を貫いた。さらに同じ書物で、ドイツ語の一般名詞の語頭を小文字書き

で書くというヤーコプ・グリムの独自方針も初めて導入され、やはり以後の著作で踏襲された。

自身でも認め、弟も嘆いたように（GrArn, 125）、信念を徹底的に貫かずにはいられなかったヤーコプは、『ドイツ文法』第 1 巻第 2 版を印刷に回しはじめていた 1820 年に、書簡でも同様の方針を開始した（Denecke 1971, 103）。その 20 年後、1840 年の『ドイツ文法』第 1 巻第 3 版で彼は主張している。

「いわゆるドイツ文字を使う者は、野蛮に書く者だ。名詞の冒頭に大文字を使う者は、衒学的に書く者だ」（JG 1840, 26）。

現在でも、一般名詞の冒頭を大文字で書く文法は残っているから、ヤーコプ・グリムの戦いは敗れたように見えるが、未来の事情は分からないのだから、いまから数百年後に勝利を収めるのは彼の側かもしれない。フラクトゥーアにしても、ヤーコプがそれに対する戦いを始めた 100 年後にも、まだ広く使われていたが、200 年後の現在では、この問題に関して勝利したのは、ヤーコプの側だったと考えるほかないだろう。

ドイツ語では一般名詞の語頭を大文字で書くのが当然だと考える人々に対して、彼は 1847 年 10 月 21 日におこなわれた講演「ドイツ語の衒学性について」で、つぎのように訴えている。

「名詞の冒頭を大文字にすることは、非難されるべき誤用です。ドイツ人の衒学趣味の悪癖は、まさにここに極まっています。私は、この点で私に同意してくれる人たちとともに、この悪癖と訣別しました。ちっぽけな始まりでも、それが進歩に道を開くはずだと信じて、そのように決断したのです。同調しない人たちは、臆病にも考えあぐねて、この決断から逃げているか、貧弱な言い訳に飛びついているかです。しかし、この革新は自然に即した書き方を取りもどすものです。ドイツの先人は 15 世紀までこの書き方を忠実に守っていましたし、ヨーロッパの外国人たちは現在でもそのままです。16 世紀から 17 世紀にかけての堕落した言語運用のなかで固定化した誤った文法が、ドイツ人の進歩の証などと言われています。そんな怪しい意見を信じたいのならば、頭にカツラを着けて髪を結わえればよいのです」（JG 1879、351–352）。

ドイツ語の一般名詞の語頭を大文字で書くのは、ヤーコプ・グリムにとって、バッハやモーツァルトのような、カツラをかぶりリボンで髪を結わえるという旧時代の因襲なのだ。

ヤーコプ・グリムは、この講演で比較言語学の見識を活用し、「ドイツ語の衒学性」を検証してゆく。そこには、いくつもの言語を学んだからこそ気づくことができる、ドイツ語にとって有益な指摘も盛りこまれている。ドイツ語の 2 人称と 3 人称すら、衒学的な文法として批判の対象になる。

「もったいぶった宮廷風の暑苦しい空気がヨーロッパ全体に広まったときに、自然な表現は

奪われてしまいました。ですがドイツ人の場合はそれ以上でした。宮廷風の風潮は不条理を高めて衒学趣味を作りだし、当然として 2 人称を使うべきところに 3 人称が出現しました」（JG 1879、334）。

ドイツ語では、2 人称（単数形〈du〉、複数形〈ihr〉）の敬称として、3 人称複数（sie）の語頭を大文字で書いた〈Sie〉を用いる（単複共通）。ドイツ語に慣れていれば常識的な文法だが、ヤーコプ・グリムにとってはドイツ語本来の文法から逸れた誤った規範なのだった。ヤーコプは言葉を続ける。

「3 人称に関しても、動詞を用いるときは複数形にするのに、そこに形容詞を足すと、それは単数形のままなのです」（JG 1879、334）。

ドイツ語では、複数の主語、動詞、形容詞を組みあわせたときに、主語と動詞は複数形にするが、形容詞は人称変化をせず、複数の形を取らない。これもドイツ語に慣れていれば常識に思えるし、英語などはさらに文法が簡素化されているが、ヤーコプには説得力のある文法ではなかった。彼は続ける。

「本来の正当な敬語表現は〈du bist gut.〉（あなたは良いのですよ）だったのですが、まず 2 人称複数の主語になぜか単数の形容詞を組みあわせて、〈ihr seid gut〉と言うような習慣ができ、果ては、もとは 3 人称複数の主語を 2 人称として用いて、かつ単数の形容詞を組みあわせて、〈Sie sind gut.〉と言うようになってしまいました」（JG 1879、334）。

ドイツ語では、〈Sie〉が敬称として使用されるようになる前に、2 人称複数の〈ihr〉（または語頭を大文字にした〈Ihr〉）が敬称として使用された時代があった。そのことを持ちだして、ヤーコプは、ドイツ語の敬称に関する規範が悪化の一途を辿ったという見取り図を示している。なるほど、英語では〈You are good.〉と表現すれば、〈You〉は語調に応じて自動的に敬称になるし、敬意を明瞭に示したければ、〈You are good, sir.〉と〈sir〉等の単語を補足すれば、充分な表現になる。

ゲーテには「外国語を知らない者は、自分の母語を知らない者だ」という有名な箴言があるが、ヤーコプはまさにこの意味で母語を熟知していた。

彼はさらに、ドイツ語には前置詞と定冠詞を縮約する仕組みがあることを話題にして、この規範の不完全さを批判する。

「〈an dem〉を〈am〉、〈in dem〉を〈im〉、〈zudem〉を〈zum〉、〈beidem〉を〈beim〉、〈zu der〉を〈zur〉という形に縮約させる仕組みは残りました。しかし古い言語では、さらにほかの前置詞と定冠詞も縮約できました。たとえば〈ze den〉が〈zen〉になりました。現代

ドイツ語だと〈zu den〉を〈zun〉にすれば良いはずですが、これが許されないのはどうしてでしょうか。〈zu der〉を〈zur〉にできるのに、〈an der〉を〈ar〉にできないのはどうしてでしょうか」（JG 1879、340）。

日本で根強い人気を保っているヘルマン・ヘッセの小説『車輪の下』を例に取ると、この小説の原題《Unterm Rad》に含まれる〈unterm〉は〈unter dem〉の縮約形なのだが、1905 年に刊行されたこの小説で使われていたその縮約形は、現在ではすでに廃れている。ドイツ語のこの文法事項は、きわめて中途半端なのだ。

ドイツ語の綴りは英語に比べれば規則的だが、ヤーコプはこれに関しても容赦しない。

「ドイツの住所録を 1 冊めくってみてください。なんという野蛮さでしょうか。〈Hofmänner〉と〈Hoffmänner〉、〈Wölfe〉と〈Wölffe〉のように、本来は同じ人名でも〈f〉は 1 個のことも 2 個のこともあります。ほかにも色とりどりの実例が大量にあります。〈Schmied〉と〈Schmidt〉、〈Schulz〉と〈Schultz〉と〈Scholz〉と〈Scholtz〉、〈Müller〉と〈Möller〉と〈Miller〉。何がどうなっているのか、と思わざるをえません」（JG 1879、351）。

ヤーコプは自分たちの文化を距離を持って眺め、理解したことを発信するのは有益だと信じた。ここには彼の知的誠実さと融通の効かなさの両方が現れている。

先に、ヤーコプ・グリムの古い文学に対する幻想が、年を経て是正されたことについて記したが（2. を参照）、言語に関しても同様のことが言える。彼は、『ドイツ文法』第 1 巻初版の序文で、つぎのように書いている。

「地球上のいかなる民族も、その言語の歴史はドイツ民族に及ばない。資料は 2000 年前にも遡り、その 2000 年間に資料や記念すべき事柄が確認されない時期はない。世界の言語のうち、かなりの歴史を持つ言語で、ドイツ語ほど多様な出来事を経験した言語があるだろうか。ギリシアやインドの言語のように、ドイツ語より完全な言語であっても、言語の生命や経過がドイツ語ほど勉強になるものは皆無だと思われる」（JG 1819, XVII）。

「ドイツ民族」はゲルマン民族、「ドイツ語」はゲルマン語を指しているのだが、ここで注目していただきたいのは、その自文化中心主義ではなく、「ギリシアやインドの言語」がゲルマン語派の諸言語よりも「完全」と見なされている点だ。本節で前述したジョーンズの見解にも共通する古代幻想だが、青年期のヤーコプ・グリムには、古い言語ほど尊いものだった。

「13 世紀の高地ドイツ語は、現在の高地ドイツ語よりも高貴で純粋な形式を示している。8、9 世紀の高地ドイツ語は 13 世紀の高地ドイツ語よりも純粋で、4、5 世紀のゴート語は 8、9 世紀の高地ドイツ語よりも完全だ。それゆえに 1 世紀にドイツ民族が話していた言語は、

ゴート語よりも卓越していただろう」(JG 1819, XVVI)。

ゲルマン民族(「ドイツ民族」)の諸言語を比較すると、古ければ古いほど「純粋」で「完全」で「卓越」している、とヤーコプは主張する。この主張の細部は、つぎのように解説される。

「言語は原初に完全なのだから、私たちが人類の成長と呼ぶものとは、まったく連動しない。言語の成長では、言語の自然性は徐々に解消しながら、別の形へと定まる。一面が高まると、一面が沈みこむ。古い言語は肉体的かつ感覚的で、完全に無垢だ。新しい言語はその後に影響力を発揮して、もっと精神的で抽象的になる」(JG 1819, XVVII)。

「言語は原初に完全」という思想は、原初の言語としてのヘブライ語が多様な言語に分化したという『旧訳聖書』の見解を、ヤーコプ・グリムが、ゲルマン語派や印欧語族に対する歴史観に流用していたことを意味する。言語は歴史を経て精神的で抽象的になるが、彼にとってそれは、肉体的で感覚的な無垢さからの没落なのだ。

だが、この書物の 32 年後、66 歳のときにおこなった講演「言語の起源について」では様相が異なっている。

「人間の言語は見かけだけなら、そして個別に見るならば退歩しているのですが、全体として見ると進歩し、内的な力が栄えてゆくのです」(JG 1879, 291)。

得意の植物イメージを用いて、彼はつぎのようにも語る。

「人間の言語の美は、最初の時点で花開いたのではありません。途中の段階で、そうなったのです。言語の豊かな果実は、未来に初めてもたらされます」(JG 1879, 294)。

青年期と老年期とで正反対の主張だ。

ゲルマン語派の、そして印欧語派の最大の言語、地球上でもっとも影響力のある言語に成長した英語に対しても、彼の論調は青年期と老年期とで明瞭に変化した。英語はノルマン朝の時代、フランス語の影響を受け、ロマンス語派の語彙を大規模に取りいれるとともに、もともとの文法を簡略化させた。この事実を青年期のヤーコプ・グリムは否定的に解説する。

「フランス語の語彙は大挙して英語に流入したが、フランス語の文法は英文法にほとんど吸収されなかった。あるいは、まったく吸収されなかったかもしれない。英語の基盤としてのサクソン語の形式が衰退したのは、それがフランス語の新しい語根に適応できず、フランス語の単語が粗雑に使われ、土着の語尾変化がないがしろにされたからだ。このために、言語の抽象的で精神的な方向性は、ドイツよりもイングランドで、ずっと早くに固まった」(JG

1819, XXXII–XXXIII)。

「抽象的で精神的な方向性」は、青年期のヤーコプの価値観では、否定的な含意を有する。彼は、英語はドイツ語よりも早くに堕落したと非難したいのだ。ところが老年期の講演では、彼はつぎのように語る。

「ゲルマン系の言語とロマンス系の言語は、近代ヨーロッパの最高に高貴なふたつの言語系統です。英語の基礎は、そのふたつの言語系統が結婚したという驚くべき事態にあります。英語はその結婚から成長し、素晴らしいことに、なんとも精神的な果実を付けました。英語の内部で、ゲルマン系の言語系統が優れて官能的な基盤を与え、ロマンス系の言語系統が精神的な諸概念を提供したことは、周知のとおりです。古代ギリシア・ローマの古い文学に匹敵するような、近代の最大かつ最高の作家は、英語の世界から誕生して、英語に支えられていましたが、その理由はここにあります。私が念頭に置いているのは、もちろんシェイクスピアです。英語が世界語と言われるのは、まったく正当なことです。イギリス国民は、将来は地球上の隅々にまで覇権を打ちたてるだろうと予想されていますが、英語も同様でしょう。英語の豊かさ、理性、引きしまった構造に、現存するほかのどの言語も匹敵しません。私たちのドイツ語も、英語にはかないません」(JG 1879, 294)。

母語であるドイツ語よりも、英語を称揚する。これも、先に見たとおりの自文化に対する距離の現れと言えよう。もっとも、このような態度で自文化を語る者は、多くの場合、自文化への叱咤激励を期しているし、ヤーコプ・グリムもその例に漏れない。

「ドイツ語はドイツ同様、分裂していて、大胆にも英語と競争するならば、かなりの欠点を捨てさらねばなりません。しかしドイツ語は心地よい思い出を提供しますし、希望を奪うことは誰にもできないのです」(JG 1879, 294)

彼のドイツ語の現状に対する評価は、当時のドイツに統一国家がなかったということへの長年の悲嘆と、結びついているように思われる。

ヤーコプ・グリムの言語研究は、究極的には、弟ヴィルヘルムとの共編著『グリム・ドイツ語辞典』に結実することになった。兄弟間でどのような分担が成されたのかについては、第 1 巻の序文でヤーコプが説明している。

「私はヴィルヘルムに「私は A をやるつもりだ。B をやってくれたまえ」と言った。ヴィルヘルムの返答は、「それはぼくにはせわしすぎる。D からやらせてほしい」というものだった」(JG 1984, Bd. 1, LXIV)。

結果から見れば、ヴィルヘルム・グリムは〈D〉の項目のみを担当し、ヤーコプ・グリムは〈A〉、〈B〉、〈C〉、〈E〉の項目を完成させ、すでに第 2 節で述べたとおり、〈F〉の項目にある〈frucht〉の途中で生涯を終えた。最後に書いた箇所には編注が付けられ、後継者ヴィーガントの説明が掲載されている。

「心残りにもヤーコプ・グリムはこの箇所をもって、この辞典のための筆を永遠に下ろした」(JG 1984, Bd. 1, 259, Anm.)。

辞典の続行は、何世代にもわたる後継者たちの活動に任された。第 1 巻の序文によると、この巻が刊行されたとき、協力者は 83 名だった(JG 1984, Bd. 1, LXVI)。この辞典の企画にグリム兄弟が取りくみはじめたのが 1838 年、第 1 巻の刊行が 1854 年、ヴィルヘルム・グリムの死去が 1859 年、ヤーコプ・グリムの死去が 1863 年だった。彼らの死後、ドイツ帝国が成立し(1971 年)、第一次世界大戦(1914–1918 年)、ドイツ革命(1918 年)、ナチス政権成立(1933 年)、第二次世界大戦(1939–1945 年)、東西ドイツ成立(1949 年)を経て、この辞典が完結したのは、企画の開始から 123 年後にあたる 1961 年だった。完結した年には、ベルリンの壁が建設された。

『グリム・ドイツ語辞典』は、分量に関しても費やされた年数に関しても、ドイツ語最大の辞典へと成長した。とはいえドイツ語に対する規範性を尺度にすると、『グリム・ドイツ語辞典』の権威は『ドゥーデン・ドイツ語辞典』にいちじるしく劣る。長期にわたって刊行され、編集体制はつねに万全のものではなかったから、項目ごとに完成度の違いも大きい。ルートヴィヒ・デーネケは、ヤーコプ・グリムが担当した箇所について、つぎのように批判している。

「珍妙な項目としてよく話題になることは、つぎのとおり。〈blindschreiche〉(「アシナシトカゲ」。「盲目で有毒の蛇」と説明している!)、〈entwicklung〉(「展開する」、資料皆無!)、〈ansammeln〉(「集める」、民間伝承の下劣な笑い話が引用され、文献が欠落!)」(Denecke 1971, 123)。

デーネケは、辞典編集の後継者たちの仕事についても補足する。

「評判が高いのは、ルードルフ・ヒルデブラントの 118 段(59 ページ)にのぼる〈geist〉(「精神」、「霊」、「精」)の総説と、同様にヒルデブラントが編集した傑出した〈K〉の巻だ。この巻は、すでに 1859 年にヤーコプ・グリムが編纂に着手していた。レクサーによる大雑把な作業(〈N〉、〈O〉、〈P〉、〈Q〉、〈T〉)は、使われた資料についても編集方針についても、今後改善されるべきとの声があがっている。ヴンダーリヒの〈gewalt〉(「威力」、175 段!)やマイヤー = ベンファイの〈stehen〉(「立っている、ある」、328 段!)に見られるように、迷走して用例の羅列に陥った編者もいる」(Denecke 1971, 123)。

『グリム・ドイツ語辞典』は、ドイツ文化史上の記念碑的著作だが、その実用的価値は歴史的価値ほど高くないのが実情だ。

6. 宗教

ヤーコプ・グリムは学問に「三位一体」の観念を、つまりキリスト教の教義を持ちこんでいた（5. を参照）。キリスト教の信仰と学問的営為が固く結びついていたという点で、ヴィルヘルム・グリムは兄と同じ道を歩んだ。本節では、彼らの学問と信仰がどのように交差していたかについて、確認しておこう。

フルドリヒ・ツヴィングリとジャン・カルヴァンの指導によって形成された、スイス宗教改革を母体とするプロテスタントを「改革派」と呼ぶ。グリム兄弟は、この改革派の信徒として成長し、その信仰は終生不変だった。

ヤーコプはシュタイナウでの子ども時代について、「自叙伝」に書いている。

> 「あまり話題にならなかったが、私たち兄弟は実践と手習いとをつうじて、厳格な改革派として教育された。この小さな田舎町には改革派が多く、ルター派はとても少なかった。私は彼らを、本当には信用してはならない外国人と見なしていた。シュタイナウから 1 時間ほど離れた場所にザールミュンスターがあり、そこからの旅行者としてカトリックの信徒がしばしば通りかかった。彼らは通常、色彩豊かな衣服を着ており、判別することができた。私は彼らのことを恐ろしげで奇怪な者たちだと考えた」（JG 1879, 1–2）。

プロテスタントのあいだでも、ルター派と改革派のあいだには溝があり、カトリックの信徒は、プロテスタントにとってよそよそしい印象を与えていた、という 18 世紀末のドイツの宗教状況が、子どもの眼をとおした証言として示されている。

グリム兄弟を生んだヘッセンは、宗教改革の時代、フランスからユグノーと呼ばれる改革派の信徒を大量に受けいれた。兄弟はユグノーの子孫と交流し、フランス系の彼らが語る昔話をドイツの昔話として記録した（Rölleke 1975, 74–86）。

ところで、グリム兄弟が敬虔なキリスト教徒だったという事実は、彼らの研究上の関心が、キリスト教化される以前のゲルマン民族の信仰世界を焦点としていたという事実と矛盾しないのだろうか。というのもグリム兄弟は、非キリスト教の時代に野蛮な社会を見たのではなく、むしろそれを高貴と考え、神話に陶酔したのだ。グリム兄弟の影響を受けたハインリヒ・ハイネは、キリスト教の権威に敵対する立場から、キリスト教以前の世界の価値に注目していたし（Heine 1837, 210; Heine 1854, 217–218）、このような立場ならば、私たちに矛盾を感じさせない。

ティークの文学史観について言及した箇所（2. を参照）でも述べたことだが、グリム兄弟は文学史に神慮を見た。1811 年 5 月 20 日付の書簡で、ヤーコプ・グリムは、ハンス・ゲオルク・

フォン・ハマーシュタイン＝エクヴォルトに、神話研究の魅力が信仰と密接に結びついていることを説明している。

「古い神話は神と根源的に関係し、秘密に満ちています。説明しつくすことはできません。古い神話はいわば泉です。その泉から私たちは桶で知識、勇気、歓喜を汲みあげ、飲むことを許されているのです」（GrHam, 61）。

なぜキリスト教の神と、異教の神話が「根源的に」関係していると言えるのだろうか。世界各地の神話は、当然ながら、しばしばキリスト教の教義と相容れない。だが、この相容れなさは否定的に見れば、キリスト教の神を冒瀆するものだが、肯定的に見れば、誤解に満ちていようとも、それでも神の栄光に賛歌をあげたものと考えることができる。神話とは、聖書に書かれた内容を不完全に伝えるものなのだと見なす視座が可能になるのだ。1812 年 10 月 29 日付の書簡で、ヤーコプ・グリムはアルニムにつぎのように語る。

「私たちには聖書、歴史、古い記念すべき事柄があり、慰めだ」（GrArn, 238）。

「慰め」はキリスト教的含意では、神の恩寵と言っても良い。人類の歴史や記念すべき事柄には、キリスト教の教義に直接関係しない要素も多く含まれているが、それらは聖書と並んで、キリスト教的恩寵なのだ。この書簡の約 2 ヶ月後、1812 年 12 月 31 日付の書簡で、ヤーコプはアルニムに宣言する。

「全体として、きみが論争しているのは文学の人間性のためにであって、私が論争しているのは文学の神性のためなのだ」（GrArn, 254）。

文学は「人間性」ではなく「神性」を帯びているからこそ、真摯に向きあう必要がある。この見解に、ヤーコプ・グリムの、否、結論から言えばグリム兄弟の研究動機の、最深部がある。宗教的実践の一環として研究活動に従事していたというのは言いすぎだろうが、彼らは、研究が宗教的正義として保証されていると感じられたからこそ、それに熱烈に打ちこむことができた。1814 年 10 月 29 日付の手紙で、ヤーコプはサヴィニーに書いている。

「先史時代に想いを馳せることは、天地創造の光景のように、私たちにとって尽きることのないものです。それは私たちの傲慢さを抑え、崇高な慰めを与えます。この抑制と慰めによって、私たちは神に結ばれています」（GrSav, 173）。

こうして、神話の研究はキリスト教の信仰を補完する。ヤーコプは、自身や弟が扱う資料に神の栄光の痕跡を見た。

言語に関しても、ヤーコプはそれが神的なものだと疑わなかった。1811 年 7 月の書簡で、彼はアルニムに書いている。

「宗教は神の顕現によって始まり、言語は同じく奇跡的な起源を有し、人間の発明によって達成されたわけではない」(GrArn, 139)。

彼が念頭に置いているのは『新約聖書』の「ヨハネによる福音書」第 1 章の文言、「初めに言葉があった。言葉は神のもとにあった。言葉は神だった」にほかならない (Luther 1999, 107)。1816 年の『ドイツ伝説集』の序文では、彼はつぎのように語っている。

「言語を観察すると、それは永遠かつ無限の計りしれない系列に段階化されている。語根のあるものは枯死し、別の語根は満開の花を咲かせた。複合語、略語、新たな意味を獲得する語、本来の意味をなくした語がある。アクセント、イントネーション、音声は変化する。変化した言語で、いずれが比較的良質か、状況から見て比較的妥当なのかを判断することは、まったく不可能ではなくとも、またその判断が犯罪的ではなくとも、かなり困難なことだ。私たちは、これらのすべてをまとめて発生させた土壌が神という源泉だったということ、その源泉が前代未聞の尺度になり、無限の閃光を放ったということを忘れたくはないものだ」(BG 1816, XIII–XIV)。

言語の根源に神の「無限の閃光」がある以上、時代を経て言語が変化していくという事態にも神慮がある、と彼は主張している。もっとも、これらの青年期に主張された神的言語論は、ヤーコプの経年によって、その熱狂性が和らいだ。老年期の講演「言語の起源について」で、彼はつぎのように語る。

「造物主は魂、つまり考える力と、言語の道具、つまり話す力という貴重な両方を、私たちの内面に授けてくれました。私たちは考える能力を使うことで、ようやく考えることができますし、言語を学ぶことで、ようやく話すことができるのです」(JG 1879, 278)。

ここでは、言語の出発点には神の栄光があるが、実際の運用には人間の能力が重要だと強調されたのだった。

ヴィルヘルム・グリムも、言語に神の顕現を見る点で、兄と変わるところはなかった。『古デンマークの英雄歌、物語詩、昔話』の序文で、彼は書く。

「民衆文学はいわば無垢の状態で、裸身で宝飾品をまとわず、神の似姿を帯びている」(WG 1811, XVIII)。

楽園を追放される前の、神の似姿としての最初の人間たち、アダムとエヴァのイメージが言語に重ねられている。ヴィルヘルムは民間伝承の本質に神性を見た。彼はつぎのようにも語る。

「民衆文学と創作の文学は大きく異なる。民衆文学は砂漠を知らない。民衆文学によって、全世界は緑をなし、爽やかで、燃える。民衆文学では、あらゆるものが天国によって包摂され、何者も見捨てられない」(WG 1811, XXX)。

人類の救済として約束された神の楽園としての民衆文学。ヴィルヘルム・グリムがなぜ「グリム童話」に生涯をかけて関わろうとしたかが、理解されるというものだろう。

ヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリムの時代には、宗教学は独立した学問分野として確立していなかった。彼らは、ともに神話の研究者として、宗教史研究の開拓者にもなった。そこで、本稿としては彼らの神話への関心について展望を得ておきたい。

グリム兄弟の著作のうち、ヤーコプの『ドイツ神話学』や、兄弟共著として始まり、やがてヴィルヘルムが専任するようになった昔話注釈は、神話と昔話の連続性というグリム兄弟の観念をよく伝えている。『ドイツ神話学』は、初版が 1835 年に、増補された第 2 版が 1844 年に、さらに増補された第 3 版が 1854 年に刊行された。ヤーコプの没後、エラルド・フーゴー・マイヤーが、遺稿として残された覚え書きを追加して、第 4 版を 1875 年から 1878 年にかけて刊行した。1812 年と 1815 年に初版が、1922 年に第 2 版が刊行された昔話注釈に関しては、特に 1856 年に刊行された第 3 版が、ヴィルヘルムの 40 年以上にわたる伝承研究の集大成になっている。

以下、ヤーコプによる『ドイツ神話学』、ヴィルヘルムによる昔話注釈第 3 版という、グリム兄弟それぞれの、神話と昔話についての議論の集大成になった書物を参照して、彼らの論述の概要を確認しておこう。

グリム兄弟は、彼らの時代に伝わっていた民間伝承を、過去のドイツ文学、ゲルマン民族の神話、過去にドイツの外で生まれた文学、またゲルマン民族以外の印欧語族の神話のそれぞれに関係づけようとする。つまりドイツの民間伝承とゲルマン神話は、必ずしも単純に連結されない。もっとも重視されるのはノルド神話だ。ゲルマン民族の神話、つまりゲルマン神話は総体としては失われているし、ドイツ神話も断片的にしか知られていないから、北ゲルマン人の神話、つまりノルド神話がドイツの民間伝承にとって最重要の参照項と見なされたのだった。

ヤーコプ・グリムは『ドイツ神話学』で、「ホレおばさん」(KHM 24) に登場する同名の人物を、ノルド神話の女神ホルダと見なし、ゲルマン民族の民間伝承に見られる「賢女」の伝統に位置づけている (JG 1875, 328–362)。ノルド神話のドヴェルグは、現在では英名の「ドワーフ」として広く知られるもので、これが昔話の小人になったと見なされるのだが、小人の考察も、印欧語族という広い枠組みでおこなわれる (JG 1875, 363–428)。「金の山の王様」(KHM 92) で王女が蛇に変えられているのは、蛇女メリュジーヌがロマンス語圏で伝承されたことに (JG 1875, 810)、「三羽の小鳥」(KHM 96) で男の子が赤い星型の痣を得て生まれてくることは、多くの神話で英雄がまばゆい光輝をともなって生誕することに対応し (JG 1875, 324)、「七羽のからす」

（KHM 25）で太陽や月や星々が会話をし、相談される相手になることも神話に普遍的な発想にほかならない（JG 1875, 590）とヤーコプは論じる。これらは、いずれもドイツの昔話をゲルマン神話のみに短絡させない議論と言える。

とはいえ、なぜあえて神話一般という広い展望を開いて、このような関連付けの作業に従事したのかと尋ねられれば、その真の狙いが、ゲルマン民族の、そしてドイツ人のアイデンティティを、その展望のなかで確定したかったからだと答えるほかない。地球各地の民族の伝統を知ることは、印欧語族を理解する前提になるし、印欧語族を理解することは、ゲルマン民族を理解する前提になる。ゲルマン民族を理解することはドイツ人を理解する前提になる。

「がちょう番の娘」（KHM 89）では、不遇になった王女の馬ファラダが首を切られ、頭部を市門に曝されても王女と会話する。ヤーコプは書く。

> 「異教は、切断され設置された馬の頭を用いて、さまざまな魔術をおこなったようだ。「がちょう番の娘」では、忠実なファラダの頭が門の上に釘づけされ、王女はその頭部と会話する。馬の頭が切断されて設置されるのは、太古のドイツの習俗だった」（BG 1856, 549）。

「異教」はここでは古代ゲルマン民族の土着信仰を指している。「太古のドイツ」は「古代ゲルマン」を意味する。さまざまな知識を駆使して昔話を考察し、そのなかに古代ゲルマンの信仰と習俗を探ることが、ヤーコプ・グリムの関心の焦点を形成していた。

このたぐいの書物は、私たちの時代に新たに刊行されるものも同様だが、連想ゲームのような無理な関連付けがなされがちだ。「賭博師ハンスル」（KHM 82）について、同書の第 2 版（1844 年）では、主人公がなんでも実る樹木とともに、いつでも勝てるサイコロとカルタを得たことから、サイコロの発明者とされるドイツ神話の主神ヴォータンと、ローマ神話の計略の神メリクリウスの神話との関係が指摘されている（JG 1844, XXXVI）。ヴォータンはノルド神話のオーディンに、メルクリウスはギリシア神話のヘルメースに対応する。古代ローマの政治家で歴史家だったタキトゥスは、『ゲルマーニア』でゲルマン人の主神をメルクリウスと見なしたから（Tacitus 1972, 15; 73）、ヤーコプは、メルクリウスとヴォータンがもとは同一の神で、その神についての逸話が、博打打ちのハンスルを主人公とした昔話に変形したと考えたのだろう。第 3 版（1854 年）では、ヤーコプ自身が、もっと慎重に書くべきと考えなおしたのか、記述はつぎのように変化している。

> 「ヴォータンは遊興の、つまりはサイコロ賭博の神、またその発案者として出現する。この神は昔話の賭博師ハンスルにいつでも勝利するサイコロを貸与した」（JG 1854, 958）。

メルクリウスは言及されなくなったが、説得力はそれほど上がっていない。「賭博師ハンスル」を読んでも、登場する神がヴォータンと言える証拠はサイコロ以外には何もないし、サイコロ自体も証拠として論拠薄弱だろう。

「のんきぼうず」（KHM 81）には、イエス・キリストの使徒ペテロが主要人物として登場する。『ド

イツ神話学』第２版で、ヤーコプは、彼らは本来はノルド神話の２柱の神、オーディンとロキだったが、キリスト教の普及によって聖書風に変形させられたと考える（JG 1844, Bd. 1, XXXVI–XXXVII）。この見解は第３版でもそのまま残されているが（JG 1854, Bd. 1, XXXVI–XXXVII）、ヴィルヘルム・グリムの昔話注釈第３版ではこの見解が言及されていない（BG 1856, 131–143）。すでに以前の論考で指摘したとおり、兄弟の主張はおおまかな方向性が一致する民間伝承論でも、しばしば相互補完にまでは至っていない（横道 2018）。

昔話をどのようなものと見なし、また扱うかという根本的な方針を兄弟は共有していた。ヴィルヘルムは、昔話「若い大男」（KHM 90）の主人公を、『ニーベルングの歌』に登場する英雄ジークフリートに関係づけている。

> 「この昔話では、見誤りようもなくジークフリートについての言い伝えとの親和性が示されている。幾多の詩は、この昔話と同じように、ジークフリートが人生をとおして、ただし若いころには特に、力強い巨人的性質を有していたことを描く」（BG 1856, 158）。

つまり、昔話と神話は原則として不可分と見なされる。「金の鵞鳥」（KHM64）は、黄金のガチョウに触れた者と、その者に触れた者が、互いに剥がれなくなるという昔話だ。ヴィルヘルムはノルド神話を思いだす。

> 「この昔話で、ガチョウに触った者や、その者に触ったものがくっついてしまうのは、ワシ（正体はスィアチ）を打つために使った棒からロキが離れなくなるのと同じなのだ」（BG 1856, 115）。

『スノッリのエッダ』第２部「詩語法」で、ワシに変身した巨人スィアチが旅する神々の牛肉を奪ったため、ロキが棒を振ってワシに当てると、棒はワシから離れなくなり、空高く飛びあがったワシにロキは攫われる（谷口 1983, 1–2）。ヴィルヘルムは、その神話が昔話の源泉だと主張したいのだ。

だが、このような説明にはどれほどの妥当性があるだろうか。無関係のふたつのものに、強引に類似性が発見されているのではないだろうか。

ヤーコプ・グリムもヴィルヘルム・グリムも、このたぐいの議論で、牽強付会の印象を与える見解をおびただしく提供している。「灰かぶり」（KHM 21）についてヴィルヘルムは書く。

> 「不幸な者が灰にまみれて座るのは、太古の風習だった。だからオデュッセウスは、異邦人としてアルキノウス王に助けを請いながら弁舌をふるい、恭しく炉の灰に身をかがめ、それから立ちあがらせてもらう」（BG 1856, 38）。

『オデュッセイア』には、事実としてそのような場面があるが（ホメロス 1994, 177–178）、シ

ンデレラの灰とギリシア神話の英雄の灰は、本当に類似した要素と言えるだろうか。ヨハネス・ボルテとイジー・ポリーフカはヴィルヘルム・グリムの昔話注釈を改訂した際、ヴィルヘルムによる「灰かぶり」についてのこの解釈を無視している（BP, Bd. 1, 165–188）。

グリム兄弟にとっては、このたぐいの描写として「ビャクシンの話」（KHM 47）に描かれたものが、特に関心の対象だった。ヤーコプは『ドイツ神話学』第 3 版で、ドイツ神話のドナーについて説明をおこなって、ノルド神話でこの神に相当するトールの逸話について書いている。

> 「トールはヤギの食いちらかされた骨を傍に持ってこさせて、捨てさせると、そのヤギに新たな命を吹きこむことができる」（JG 1854, 168）。

問題の場面は『スノッリのエッダ』で歌われる。トールがヤギに車を引かせてロキと旅をし、農家に泊まる。トールは 2 頭のヤギを殺し、料理を作るが、そのあと山羊の皮を床に広げ、農民たちに骨を集めて置かせる。翌朝早く、トールがミョルニルという槌を振りあげ、山羊の皮を清めると、2 頭のヤギは蘇生する。ただし蘇生前に 1 本の大腿骨が割けていたため、1 頭は足を悪くしていた（ネッケル , 260–261）。ヤーコプは、『ドイツ神話学』第 3 版で、この神話をドイツの昔話に関連づけていないが、同書第 4 版の記述では上に引用した箇所を再録した上で（JG 1875, 154）、直後に注釈を付けて、「ビャクシンの話」への参照指示をおこない、別の神話にも言及する（JG 1875, 154, Ann. 1）。

> 「ゼウスとタンタロスの神話で、デーメーテールはペロプスの肩を食べてしまうが、これはヤギの腿が割られて、足が悪くなってしまうことを思いださせる。オシリスの神話や聖アーダルベルトも参照されたい」（JG 1875, 154, Ann. 1）。

紀元前 1 世紀から紀元後 1 世紀に、ラテン語で著述活動をおこなったガイウス・ユリウス・ヒュギーヌスの見解を粗雑に記録したものとして知られる『神話集』や、その同時代人オウィディウスが残した『変身物語』に、ここで言及された「ゼウスとタンタロスの神話」は記されている。人間タンタロスは神に挑戦しようとし、息子のペロプスを殺し、その体を切りきざんでシチューにして、神々に食べさせようとする。怒った神々によってペロプスは復活したが、肩の部分を女神デーメーテールが食べてしまって足りなかったため、彼女は象牙でこれを補完する（ヒュギーヌス 2005, 128–129; オウィディウス 2019, 第 1 巻 , 273–274）。

彼らよりものちの時代に、ギリシア語で著述したプルタルコスは、『倫理論集』で、ギリシア神話の影響が感じられるエジプト神話を紹介しており、そこにヤーコプが言及した「オシリスの神話」が含まれている。オシリスは妹のイシスと、彼らの弟テュポンは別の妹ネプテュスとそれぞれ結婚し、オシリスが王として即位する。オシリスはネプテュスと姦通し、テュポンは政変を起こしてオシリスを弑逆する。イシスはオシリスの棺を探して旅を重ね、ついにこれを発見するが、テュポンはこの遺体を 14 の断片に切断してばらまく。イシスはこの断片も探し、男根を除

いて見つけだし、オシリスを復活させる（プルタルコス 2009, 22-30）。

「聖アーダルベルト」として言及されているものは東プロイセンの伝説で、グリム兄弟の時代に収集され、報告されていた。この伝説で聖人アーダルベルトは、キリスト教化されていなかったプロイセンで、異教の司祭によって刀を振るわれ、斬殺されてしまう。だがキリスト教を信じるポーランドの王が尽力して遺体を返還してもらうことで、肉体は再生する（Tettau/Temme 1837, 31–34）。

ヤーコプ・グリムの以上の記述に対応するかのように、ヴィルヘルム・グリムは、昔話注釈第 3 版で「ビャクシンの話」（KHM 47）の注釈に、つぎのように書いている。

> 「オシリスとオルペウスの神話、そしてアーダルベルトの伝説でも、骨を集める話がある」（BG 1856, 79）。

また、このようにも書かれる。

> 「ゼウスは料理にされた子どもの肉体を蘇えらせ、デーメーテールが食べてしまった肩甲骨を象牙で代用する」（BG 1856, 79）。

次の記述もある。

> 「トールは食べたヤギたちの骨を集めて、一瞬で命を吹きこむ」（BG 1856, 79）。

ヴィルヘルムが言及している「オルペウス」の神話とは、ギリシア神話のよく知られた冥界下りのことだ。ラテン語詩人の最高峰として知られるウェルギリウスは、『農耕詩』第 4 歌で、この物語を伝えている。吟遊詩人オルペウスは、亡くなった妻エウリュディケーを取りもどすために冥界に赴き、再会を果たすが、冥界を出るまえに後ろを振り返ったために、妻を地上に戻せなくなってしまう（ウェルギリウス 2004, 203–206）。

私たちは、『古事記』で語られた似た物語を思いだすかもしれない。伊邪那岐（イザナギ）がオルペウスの、伊邪那美（イザナミ）がエウリュディケーの役回りを務める。伊邪那岐が黄泉の国から去るときに、後ろを振り返ると、伊邪那美は腐敗して蛆を湧かせ、8 種類の雷を帯びている（西郷 1975, 172–181）。ただしウェルギリウスの作品には、そのような凄惨な描写はない。ヴィルヘルムは、骨を集めて復活する描写があると考えているが、そのような描写もないから、彼は記憶違いをしているのかもしれない。

ヤーコプは弟と異なって、オルペウスに言及していない。以上に引用した兄弟それぞれの「ビャクシンの話」に関する指摘は、兄弟がそれぞれ独自に言及した共通性のある箇所を選んだに過ぎない。ヤーコプはヴィルヘルムよりも豊富な指摘をおこなっており、そのなかには兄弟が編纂した『ドイツ伝説集』の「溺れた子ども」（DM 62）も含まれる。湖で子どもを亡くした母親が、

神と聖人たちにせめて骨を返して欲しいと訴える。嵐のたびに少しずつ運ばれてきた骨を母親が布でくるみ、教会に持っていくと、布は重くなり、子どもが復活する。右手の小指が欠けていたので、母親は入念に探して発見し、教会に奉納する。そのような伝説だ。

このように、グリム兄弟の記述は相互に補完的なものでもなければ、綿密に役割分担を果たしているわけでもないが、共通して昔話の根源を神話に見て、そのような仕方で人間の宗教性を探究しようとしたのだった。

おわりに──歴史

グリム兄弟の関心にとって、民俗への関心は法や文学への関心より根源的だが、宗教への関心は、民俗や言語よりもさらに根源的だ。だが、より根源的なものがあり、それは「歴史」と言える。グリム兄弟の法学は法制史研究、文学研究は文学史研究、民俗学研究は民俗史研究、言語学研究は言語史研究、宗教研究は宗教史研究という性格を持っている。彼らは現在の私たちにはきわめて多岐に渡る研究をおこなったと言えるが、すべての事象が歴史性に貫かれているという視座を前提にしていた。

19 世紀ドイツ史研究の大家トーマス・ニッパーダイは、19 世紀には学問から哲学の主導権が失われ、歴史主義に依拠した人文学（「精神科学」）が台頭したことを、「近代の精神的大革命のひとつ」と形容している（Nipperdey 1983, 498）。グリム兄弟の時代に、「世界は体系ではなく、歴史だ」という観点が共有されるようになった（ibid.）。この風潮をそのまま体現するかのように、グリム兄弟の研究はつねに歴史的研究だった。

繰りかえしになるが、グリム兄弟の研究は、私たちには未熟で萌芽的なものに見える。しかし、彼らの開拓的な研究によって敷かれた線路の先で、私たちは彼らの後継者として、私たちの研究をおこなっている。

資料

（1）グリム兄弟の著作と書簡

[BG 1816] Brüder Grimm (hg.) (1816): *Deutsche Sagen. Bd. 1. Berlin (Nicolai).*

[BG 1856] Brüder Grimm (hg.) (1856): *Kinder- und Hausmärchen.* Gesammelt durch die Brüder Grimm. Dritter Band. Dritte Auflage. Göttingen (Dietrich).

[BG 1984] Grimm, Jacob / Grimm, Wilhelm (hg.). *Deutsches Wörterbuch.* 33 Bde. München (DTV).

[JG 1819] Grimm, Jacob (1819): *Deutsche Grammatik. 1*. Theil. Göttingen (Dieterich).

[JG 1822] Grimm, Jacob (1822): *Deutsche Grammatik.* 1. Theil, 2. Ausgabe. Göttingen (Dieterich).

[JG 1840] Grimm, Jacob (1840): *Deutsche Grammatik.* 3. Theil Göttingen (Dieterich).

[JG 1844] Grimm, Jacob (1844): *Deutsche Mythologie.* 2. Ausgabe. 2 Bde. Göttingen (Dieterich).

[JG 1848] Grimm, Jacob (1848): *Geschichte der deutschen Sprache.* 1. Ausgabe. Leipzig (Weidmann).

[JG 1871] Grimm, Jacob (1871): *Kleinere Schriften.* Bd. 5. (Recensionen und vermischte Aufsätze. Zweiter Theil.) Berlin (Ferd. Dümmler).

[JG 1875] Grimm, Jacob (1875): *Deutsche Mythologie.* 4. Ausgabe. Besorgt von Elard Hugo Meyer. Bd. 1. Berlin (Ferd. Dümmler).

[JG 1879] Grimm, Jacob (1879): *Kleinere Schriften.* (Bd. 1. Reden und Abhandlung.) 2. Auflage. Berlin (Ferd. Dümmler).

[JG 1882] *Kleinere Schriften.* Bd. 6. (Recensionen und vermischte Aufsätze. Dritter Theil.) Berlin (Ferd. Dümmler).

[JG 1890] *Kleinere Schriften.* Bd. 8. (Vorreden, Zeitgeschichtliches und Persönliches. Vierter Theil.) Gütersloh (C. Bertelsmann).

[WG 1811] Grimm, Wilhelm (1811): *Altdänische Heldenlieder, Balladen und Märchen.* Heidelberg (Mohr und Zimmer).

[WG 1834] Grimm, Wilhelm (1834) (hg.): *Vridanks Bescheidenhait.* 1. Ausgabe. Göttingen (Dieterisch).

[WG 1881] Grimm, Wilhelm (1881): *Kleinere Schriften.* Bd. 1. Gustav Hinrichs (hg.). Berlin (Ferd. Dümmler).

[WG 1883] Grimm, Wilhelm (1883): *Kleinere Schriften.* Bd. 3. Gustav Hinrichs (hg.). Berlin (Ferd. Dümmler).

[GrArn] Steig, Reinhold (1904): *Achim von Arnim und Jacob und Wilhelm Grimm.* (Achim von Arnim und die ihm nahe standen. Bd.3). Stuttgart / Berlin (J. G. Cotta).

[GrBre] Steig, Reinhold (1914): *Clemens Brentano und die Brüder Grimm.* Stuttgart / Berlin (J. G. Cotta).

[GrGri] Rölleke, Heinz (hg.) (2001–2006): *Briefwechsel zwischen Jacob und Wilhelm Grimm.* Kritische Ausgabe in Einzelbänden. 3 Bde. Stuttgart (S. Hirzel).

[GrHam] Gotzmann, Carola (hg.) (1985): *Briefwechsel der Brüder Grimm mit Hans George von Hammerstein-Equord.* Marburg (N.G. Elwert).

[GrSav] Schoof, Wilhelm (hg.) (1953): *Briefe der Brüder Grimm an Savigny. Aus dem Savigny-schen Nachlass.* Berlin (E. Schmidt).

（2）その他

Denecke, Ludwig (1971): *Jakob Grimm und sein Bruder Wilhelm.* Stuttgart (Sammlung Metzler).

Ginschel, Gunhild (1989): *Der junge Jacob Grimm, 1805–1819.* 2., um den Aufsatz „Der

Märchenstil Jacob Grimms“ und ein Register erweiterte Auflage. Berlin (Akademie).

Heine, Heinrich (1837): *Der Salon.* Bd. 3. Hamburg (Hoffmann und Campe).

Heine, Heinrich (1854): *Vermischte Schriften.* Erster Band. Hamburg (Hoffmann und Campe).

Jones, Sir William (1824): *Discourses Delivered before the Asiatic Society, and Miscellaneous Papers, on the Religion, Poetry, Literature, etc., of the Nations of India.* Edited by James Elmes. London (Printed for Charles S. Arnold).

Koziełek, Gerard 1977: *Mittelalterrezeption. Texte zur Aufnahme altdeutscher Literatur in der Romantik.* Tübingen (Max Niemeyer)

Luther Martin 1999: *Die Bibel.* Nach der Übersetzung Martin Luthers. Mit Apokryphen. Evangelische Kirche in Deutschland (hg.). Stuttgart (Deutsche Bibelgesellschaft).

Nipperdey, Thomas (1983): *Deutsche Geschichte 1800–1866.* Bürgerwelt und starker Staat. München (C. H. Beck).

Rölleke, Heinz 1975: „Die ‚stockhessischen‘ Märchen der ‚Alten Marie‘. Das Ende eines Mythos um die frühesten KHM-Aufzeichnungen der Brüder Grimm“, *Germanisch-Romanische Monatsschrift* 25, S. 74–86.

Savigny, Friedrich Carl von (1814): *Vom Beruf unsrer Zeit für Gesetzgebung und Rechtswissenschaft.* Heidelberg (Mohr und Zimmer).

SIL International (2020), “What are the top 200 most spoken languages?”, *Ethnologue. Languages of the World.* <www.ethnologue.com/guides/ethnologue200>

Tacitus 1972: *Germania. Lateinisch und Deutsch.* Übersetzt, Erläutert und mit einen Nachwort herausgegeben von Manfred Fuhrmann. (Stuttgart) Reclam.

Tettau W. J. A. von / Temme J. D. H. (hg.) (1837): *Die Volkssagen Ostpreussens, Litthauens und Westpreussens.* Berlin (Nicolai).

Tieck, Ludewig (hg.) 1803: *Minnelieder aus dem Schwäbischen Zeitalter.* Neu bearbeitet und herausgegeben. Berlin (Realschulbuchhandlung).

Werkmüller, Dieter (1972): *Über Aufkommen und Verbreitung der Weistümer. Nach der Sammlung von Jacob Grimm.* Berlin (Erich Schmidt).

Wyss, Ulrich (1979): *Die wilde Philologie. Jacob Grimm und der Historismus.* München (C. H. Beck).

ウェルギリウス（2001）『アエネーイス』、岡道男 / 高橋宏幸（訳）、京都大学学術出版会。

梅謙次郎 1896:「我新民法ト外国ノ民法」、『法典質疑録』、法典質疑會（編）、第 8 号、669–679 ページ。

オウィディウス（2019）『変身物語』、高橋宏幸（訳）、全 2 巻、京都大学学術出版会。

堅田剛（1985）『法の詩学　グリムの世界』、新曜社。

堅田剛（2010）『独逸法学の受容過程　加藤弘之・穂積陳重・牧野英一』、御茶の水書房。

クラーマー、カール = ジーギスムント（2015）『法民俗学の輪郭──中世以後のドイツ語圏にお

ける町村体と民衆生活のモラル』、河野眞（訳）、文緝堂。
西郷信綱 （1975）『古事記注釈』第 1 巻、平凡社。
清水誠（2012）『ゲルマン語入門』、三省堂。
谷口幸男（1983）「スノリ『エッダ』「詩語法」訳注」、『広島大学文学部紀要』第 43 巻特輯号 3、1–122 ページ。
永田善久（2001）「拡張されるゲルマニスティク――『判告録』に結晶するヤーコプ = グリムの研究方法論」、『福岡大学人文論叢』、第 33 号、1639–1674 ページ。
ネッケル、V. G. / クーン、H. / ホルツマルク、A. / ヘルガソン、J.（編）（1973）『エッダ――古代北欧歌謡集』、谷口幸男（訳）、新潮社。
ヒュギーヌス（2005）『ギリシャ神話集』、松田治 / 青山照男（訳）、講談社。
プルタルコス（2009）『モラリア』第 5 巻、丸橋裕（訳）、京都大学学術出版会。
ホメロス（1994）『オデュッセイア』、松平千秋（訳）、第 1 巻、岩波書店。
横道誠（2013a）「ドイツ・ナショナリズムの文脈あるいは汎欧州的・超欧州的文脈における「眠り姫」伝承（前編）」、『京都府立大学重点戦略研究費「異文化共生学」の構築　報告書　異文化の接触・交渉・共存をめぐる総合的研究』、岡本隆司（編）、83–124 ページ。
横道誠（2013b）「ドイツ・ナショナリズムの文脈あるいは汎欧州的・超欧州的文脈における「眠り姫」伝承（後編）」、『京都府立大学学術報告・人文』、第 65 号、11–37 ページ。
横道誠（2014a）「グリム兄弟の「棘荊姫」（KHM50）の版異同――本文改訂と『自注』改訂のねじれた連関」、『説話・伝承学』、説話伝承学会（編）、第 22 号、187–205 ページ。
横道誠（2014b）「グリム兄弟著『民間説話』収録「荊棘姫」（KHM50）注釈初版（1812 年）・第 2 版（1822 年）・第 3 版（1856 年）――学術書の文学的文体」、『AZUR』、京都府立大学ドイツ文学会（編）、第 6 号、1–25 ページ。
横道誠（2014c）「話型 ATU410 再考――グリム兄弟の『歌謡エッダ』 研究・翻訳から系統仮説へ（付・スタロスティナ論文の邦訳と関連資料）」、『京都府立大学学術報告・人文』、第 66 号、13–65 ページ。
横道誠（2015a）「グリム兄弟による「歌謡エッダ」（古ノルド語）のドイツ語訳――「青年シグルズの歌」を例として（その 1）」、『AZUR』、京都府立大学ドイツ文学会（編）、第 7 号、2015 年、21–42 ページ。
横道誠（2015b）「グリム兄弟による『歌謡エッダ』（古ノルド語）のドイツ語訳（その 2・完結編）――「青年シグルズの歌」を例として」、『研究報告 2014/15』、2015 年 4、25–45 ページ。
横道誠（2015c）「マンハルト派の理論」についての史的批判的記述――ドイツ神話学派の学問的系譜（ヤーコプ・グリム、ヴィルヘルム・マンハルト）と J. G. フレイザー、ケンブリッジ典礼学派、文学的モダニズムの著作におけるその受容」、『京都府立大学学術報告・人文』、第 67 号、31–64 ページ。
横道誠（2018）「神話と学問史――グリム兄弟とボルテ / ポリーフカのメルヒェン注釈」、『「神話」を近現代に問う』、植朗子 / 南郷晃子 / 清川祥恵（編）、勉誠出版、31–42 ページ。

注

KHM ＋数字はグリム兄弟が編纂した『子どもと家庭の昔話集』に収められた昔話の、DM ＋数字は同じくグリム兄弟が編纂した『ドイツ伝説集』に収められた伝説の作品番号を示す。

謝辞

本研究は、KSPS 科研費 JP17K18009 の助成を受けた。

（2020 年 9 月 28 日受理）

（よこみち　まこと　文学部欧米言語文化学科准教授）